

とある個性の悪党 (ヒーロー！？)

邪帝

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしもヒーローアカデミアの世界に一方通行みたいな個性を持った少年がいたらという話

光があるところに闇はある

表の世界では生きていけない裏の環境で育ってしまった少年に光は差し込むのか
果たして

目次

とある事件の捜査と少年の日常	1
とある思いを胸に	7
とある美学と邂逅	22
とある力の使い方	32
とある油を注ぐ悪党の戦い？	39
とある鹵獲作戦とヒーロー!?	48
とある戦いと願い	63
とある救いと狂気	76
とある祈りと最強と最恐	82
とあるカルテと少女	95
とある回復とその後	113
とあるリハビリと少年の新しい日常	

119

とある提案と忘れ物	130
とある孤高と元最恐	140
とある設定資料	151
とある因縁の襲来	156
とある悪党と残党	165
ただし絶望するのは てめえらだ	

とある事件の捜査と少年の日常

世界総人口の八割が何らかの特異体質である超人社会となった現在。

生まれ持った超常的な力“個性”を悪用する犯罪者・敵（ヴィラン）が

増加の一途をたどる中、同じく“個性”を持つ者たちが“ヒーロー”として敵（ヴィラン）や災害に立ち向かい、人々を救う社会が確立されていた。

日夜活動しているのはヒーローだけではない警察やヒーロー公安委員会も

そんな彼らにも頭を抱える問題が・・・

「これで今月何人目だ？」

「把握してるだけで15人です」

警察は日夜を問わず事件などを捜査しているが二人の警察関係者は目の前の惨状を見ても言う

「酷いな・・・これはだワン」

「署長!？」

（今月に入ってから東京都内だけでヴィランが殺害又は瀕死の状態で見られているが）

「一番これは酷いな・・・」

「ええ・・・私もこれは流石に」

現場ではヴィランだったと思われる肉片とおびただしい血溜まり　そして

「なにか文字が書いてありますが・・・」

「ああ　やはり奴かだワン」

悪党が・

血でメッセージが描かれていた

「仲間に伝える暇もなく殺されたとのだワン」

（反撃する事も出来ずにするほどの個性能力の持ち主・・・）

署長は思う　なぜビルがずれてるか　なぜ壁が破壊されてるか
いずれにせよ　このままでは一般市民に影響がでるのだワン

市民の安全のために警察はこの悪党を捕まえないといけないと

しかしその人物像や行動原理から見えてくるのは ヴイラン抹殺思考という
ヴィジランテという答えを出しているが・・・

その悪党はと言うと

都内某所ファミレスにて

「現在 東京都内で悪党によるヴィラン殺害事件についてお送りしました」
ニュース番組ではトップニュースとして扱っている

(もぐもぐ)

そんな事にもお構いなしに少年はステーキランチを黙々と食べている

(フン・・・暇なもんだな・・・)

コーヒーに手を掛け飲食を続ける

少年は自ら起こした事件に興味などないなぜなら

少年にとってはただの三下・・・社会のゴミ掃除をしたまで

今回の一件はある依頼人から「この町のヴィランを掃除してくれ」と依頼を受けただけ

詳細なんぞ気にした事はない いつものことだ

これまで処分してきた犯罪者の事を考えれば少年にとってはいつもやっている日常

生活の一環に過ぎない

少年にとって美学がある　悪党と言う名の象徴でヴィランに脅威畏怖を与えて

こんな世の中に必要なのは絶対的な悪だ!!

無論世論はそれに対して

「このままではヒーロー社会の脅威になりかねませんが警察はまだ悪党を掴めてないのですか!」

「警察の見解では今だに犯人像が見えていないようです」

コメンテーターやアナウンサーも討論が熱くなる

「いくらだ?」

「1580円になります・・ありがとうございます!!」

少年は朝食を済ませ店を後にする

こんな時間からファミレスなんて?と考えるファミレスのスタッフもいるが

少年にとっては好きな物を食べてるだけで幸せなんだと思ってる

手提げには好きな缶コーヒーを大量に抱え込みその内の一本を開けて飲みながら歩
行する

同じ年齢の子だったら学校に通って青春時代を謳歌するのだが

少年は既に裏の世界で力をつけてしまい今更表の世界に帰る気もない
学生服を着た同年代の子達は違う方向に歩く

少年の思考はまさに常軌を逸していた

平和の象徴であるオールマイト象を見ながら少年は

「それでも俺はこのヒーロー社会の中では最恐で名乗り続けるしかないんだ」
そお自分に言い聞かせ少年は歩き続ける

例えそれが修羅の道だとしても

とある思いを胸に

「美鈴さああああん・・・こちらをお皿お願いします」

「はい!!」

とある会社の食堂の調理場でメイドの恰好をした女性の方がテキパキと皿を片付け皿を洗い それをこなしていく

昼時になれば食堂は社員などで忙しくなり食堂はさながら戦場化している

「はい・305番の方Bランチよー!!」

掛け声と共に声が食堂に広がる

「あ!?!それ俺のです」

「はい どうぞー」

女性はそれを渡すと次々に出る出来上がった料理を腹を空かせた社員達に
どんどん置いていく

「美鈴さん 休憩時間になります」

「はあい♥ これを渡したら休憩入りますねー」

受け持った料理を置いて彼女は休憩に入る

つかの間の休憩は彼女にとって唯一の安らぎであり

貴重な時間だ

バックから端末を取り出して操作する

「どうも美鈴です・・・そうですか 些細な事でもいいので情報お願いします」

彼女は電話を切る

「はあ・・・」

ため息は出てしまう

(生きてればいいけど・・・もう10年は過ぎてるとはいえ最悪の事態も想定しないといけないとはいえ)

「トオルちゃん今どこにいるの？お母さん・寂しいのよ」
その瞳には涙が浮かんでいる

「美鈴さん・・・」

「あら？才子ちゃん 学校は!？」

そこに来たのは息子の許婚であり親友の娘才子

「今日は短縮授業だったので寄り道を」

「ごめんねこんなだめなお姉さんで」

「いえいえ決してそんなことはありません ただ寂しい表情していたので」

私もだめね こんなかわいい娘にそんな表情させるなんて 酷いわね

そうよまだ諦めてはだめよ!! あの人の約束果たさないと

自分に喝を入れて

「才子ちゃんお昼は？」

「いえこれから済ませようと思ってたところですわ!!」

「ちようどいいわ 一人ぐらいなら席空きが空くから食べていかない？」

「じゃあご厚意甘えてお願いしますわ」

そお会話して彼女達は食堂に戻る

「美鈴さん先程の電話先はやはり」

「ええ・警察の方々よ 一応行方不明者の情報をね」

「そうですか、トオル君どこに」

彼女達は行方不明者リストに入っている想い人（トオル）を探している

かつて親同士で決めたの許婚 お互いに子供同士でも

いい関係で結ばれて幼い頃とはいえ将来を決めた仲でもあったが

「あの客船転覆事故から10年経ったけど私はトオルが生きっていると確信してるのよ」

「美鈴さん、分かってます 当時の事は私達家族も衝撃が走りましたわ」

10年前 豪華客船座礁!? 座礁原因は個性による事故

美鈴とトオルが乗っていた豪華客船がテロリスト（ヴィラン）の手によって座礁

ヒーロー達が現場へ駆けつけ鎮圧 乗客乗員299名生還 行方不明者1名

御坂美鈴の長男 ヴィランの個性無断攻撃によって海へ放り出される

テロリストの一人が女性に手を出そうとした時に子供がヴィランに抵抗したため邪魔だと言わんばかり子供を枕木にくくりつけそのまま縛って海へ放り投げる

当時のニュースとしては ヴィランの前に立ちまはだかった子供が無謀にも母を守るために犠牲になってしまった 母親は絶望にさらされたと

「あの時、私が動けばよかったのよ!!」

「美鈴さん!!自分を責めないでください」

その後すぐに駆け付けたヒーロー達によってヴィラン達は捕縛されすぐさま息子の捜索もしてくれた

しかし

現実是非情だった

「息子さんを縛り付けてた枕木は見つかりましたが・・」

「ねえ!! トオルはトオルは!!」

息子を検索してくれたヒーローの手を掴みながら懇願する

見つかってほしい　せめてなにかなにかと

母の叫びにヒーロー達や海上保安達も絶望的な生存率を察してるが

「暗い雰囲気!! 私!! きたああああ!!」

そこに現れたのはヒーロー界トップに君臨するオールライトが参上した

「オールライト!?　ねえトオルは!? トオルは!?!」

「落ち着いてくださいトオル少年のお母さん」

なんとかオールライトは母親を落ち着かせようとする

「ご子息のことで少し進展がありました」

「え!?!」

トオルは生きているの? それとも?

母親としてせめて

「トオル少年は現地の方によると病院へ運ばれたそうなのですが・」

「え!?なにがあつたの!?!」

そこで普通だったらあり得ない事が起きたらしい

その内容にその場にすべての人間が驚く

なんでも

浜辺に打ち上げられていたトオルは現地の方にすぐさま応急処置をされて

救急車で運ばれ 現地の病院で運ばれたそうだ

「問題はその後なんです」

「どおいうことなんですか?」

オールマイトはすぐさま現地の方々にトオル少年が運ばれた病院の元に行こうと即座に移動をしたのが

「ところがその病院の住所を行ったのですが」

なんと建物事態は存在するが幽霊病院という

オールマイトは即座に現地の方々に再確認した

「確かにトオル少年は意識を取り戻したと しかしその後の地元住民達の記憶が曖昧」

だと

「うちのトオルはどこに!？」

「ここから先は警察の方に説明してもらいましょう」

「塚内君いいかね？」

一人の警察官が言い始めた

「ああ トオル君が運ばれた先がある程度は分かったのですが」

警察の方曰く

確かにカメラにはトオルの運ばれた救急車があるということそして

現地の方々がその場所に行ったという幽霊病院に運ばれている

「実はこの後の動きをみてください」

カメラに映っていたのは

装甲車!?!え?という表情が室内に広がる

「調べてみたのですが・・・米国のとある機関なのですが 美鈴さんにかご存じないですか?」

「そんなあの人が勤めていた研究所の車よ」

どおして？今更あの人が勤めていた職場の

「恐らくなんですが・・個性を兵器として扱う者達の」

「そんな!？」

私はそこで意識を無くした

そして

「あの時ヒーロー達の皆さまと警察・公安の方々にお世話になったのは」

「美鈴さん…」

「無論トオルを個性で兵器にしようとした奴等は皆捕まえてくれたわ」

「そしてトオルさんは……いまだに」

更なる追い打ちがあった

トオルが誘拐されて数年後 その研究所が日本の山奥で見つかり

そこで行われていたのは非人道的な実験を繰り返し個性という能力で兵器化（戦士）するという

「私も同行させてほしいとお願いしたけどだめだった」

「私も少しでも手伝いがしたいと思いい父や母に働きかけてみたのですが」

それは叶わなかった 相手はテロリスト組織で

国際的なヴィランがいるかもしれないということで民間人はだめだと

ヒーロー達や警察・公安もその場所へ向かい救出及び逮捕しようとして行動を開始するが

その研究所で無残にも残されていたのは夥しい血の後や散乱した器材など

更には行方不明になっていた人々が暗い牢獄にいたこと

中には既に死んでいた者もいた

「トオルがあんな環境にさらされていたなんて今でも想像したくないほどよ」

「私も両親の親しい警察関係者から聞いてはいましたが」

母は息子が生きていればいいせめてと思ひ

才子も好きな人が生きていればいいと

「実験記録でトオルは・・・人を殺していたのよ」

「……」

個性を使った戦闘実験記録でたしかに息子は生きていた

しかしそのためにあの子は 殺人に手を染めてしまったのよ

この事件は余りにも世間に衝撃を走らせた!!

米国のテロリスト達（ヴィラン）が非人道的な個性実験を行っていたと

国際問題にも発展して その場に捕らわれていた被害者達や遺族への対応に迫われ

日本政府は米国に対してテロリスト達の断罪を要求

そして関わっていた企業に対する制裁を要求

被害者達へ損害賠償に対する支払い

心のケアなど

そして

いまだに行方不明とされているのが

御坂美鈴のご子息 御坂トオル

「正直私も息子がもう戻ってこない可能性も考えたわ・・でも」

「諦めきれないですわ私も美鈴さん」

2人は思いを胸に彼が生きていて再会できると信じて 例えそれが暗い深い闇でも

会話している内にランチセットは来ており既に少し冷めた料理だけど彼女らそれを食べることにした。

冷めてはいたがそれがなぜか暖かく感じた。

ところ変わって 某所にて

「てめーなにしゃがってんだ!! ああ!!」

「ひいひい許してくれ ただ俺は あげば?」

男はただ依頼されて少年に手を掛けようとしたが逆に返り討ちに遭う

ボロ雑巾のようになった男を見る

「誰にちよつかいだしたのかわかってんのかああ!!」

「.....」

「ち!!:気絶してやがる」

悪党は自ら来る火の粉を払っただけであって

「胸糞な気分だぜ..... どうせ大方俺の個性を試そうとした馬鹿共の仕業だろ?」

彼は気絶して倒れている男に向かって言う

「まあもつともこいつは捨て駒なようだが..... こつちから出向いてやつからよおおお

!! ゲヒヤヒヤハハ!! 最ツ高に活かした三下のオブジェにしてやつからよ!!」

少年はまるで楽しそうなおもちやを見つけた喜びをする

「誰に手―出したかわからせてやつからよー!!」

ボロ雑巾になつていた男を個性で地面を蹴り上げ

突起物を出して串刺し公みたいな形を作る

見せしめである

後に見つけた地元住民からはこういう

「串刺しされたヴィラン象」と

なおボロボロになつていた男は自ら刑務所に臨んで入ったそうだ

毎夜来る悪夢にうなされて

とある美学と邂逅

最近悪党に絡む事件を捜査している県警本部

どれもこれも警察や公安ヒーロー達ですら手を焼いている案件ばかりだ

「警部やはりこれは・・・」

「間違いない依頼されてるな」

もともと誰が悪党に連絡を取り入れてるかが問題だが今は

どれもこれもヴィランや準ヴィランを殺害または瀕死の状態にするほど

唯一の分かっているのは

「白髪か・・・相当の年齢というわけか？」

「いいえどうもなんか証言を聞く限り・・・」

少し時間を遡る

「さて君は運よく生き残ったわけだがなにがあつた？」

男は机越しに犯罪者に質問する

「俺はなにもやってねえ・・・ただただ」

身を震わせながら怯えてる

「大丈夫だここは警察署だ素直に話すがいい」

「ひいひい!!? 無理だ奴が… 奴が!!」

突如暴れ出す加害者

「取り押さえろ!!」

声を出して加害者をその場で落ち着かせるように抑える

ガチャ

突如扉が開く

「あ? これはベストジーニストさん」

「こいつが唯一悪党を目撃した人物か?」

即座に個性（ファイバーマスター）を使って加害者を縛り椅子に縛り付ける

「すまない」

「いえ我々も悪党の情報が入るならお安いですよ」

「さてこのまま監獄で監視されながら過ごすか、少しでも良い場所で過ごすかどちらがいい?」

少しドスの聞いた声で唯一の目撃者に問う

「無理だ… もししやべったらりしたら」

「せめて特徴だけでも教えてくれ．．．我々ヒーローも街の治安のためにも」
ベストジーニストは素直に言う

目撃者も観念した感じで

「わかった．．．俺はただ悪党．．．いやアクセラレータ（一方通行）を．．．」

そして今現在

「白髪か・・・相当の年齢というわけか？」

「いいえどうもなんか証言を聞く限り・・・赤い瞳で少年だそうですまだ」

「少年だと!? バカな!!」

驚きの声上がるのも無理はない 日夜ヴィランと戦うヒーロー達や警察からすれば

こんだけの事件を起こしてる張本人がまだ未成年だということ

「我々捜査本部は過去の行方不明者リストをチェックして目撃者のもう一つの証言で該当する人物を・・・」

「かつて十年前に豪華客船ジャック事件で行方不明になった御坂美鈴のご子息・御坂トオルだと判明しました」

どよめきが走る

かつてあらゆる捜索が行われヒーローや公安の方々も懸命な捜査にも拘らずいまだに行方不明だった人物が…

未成年の少年が手を犯罪に染め裏の世界で闇深く染まり あらゆるヴィラン・犯罪者を恐怖で震え上がらせるほどに成長した

どんな個性を使っている？なぜそおまでして情け容赦なしに殺人すら問わないのか
少年の青春は奪われてしまった 保護者にご説明すればいいか

その場にいた警察関係者はただ沈黙するしかなかったが…

「私がああああ!!捜査本部にいいい!きたああああ!!」

「オールマイト…」

「オールマイトさん」

突如ドアを勢いよくドアを開けて登場する人物

「塚内くんから詳細は聞いた!!トオル少年を救うぞ」

「オールマイトしかし相手は:」

その言葉を遮るように

「私はあんなに悲しんだトオル少年の母親にちゃんと帰してあげると誓ったのだ!!」

オールマイトは相手がたとえどんな悪の手に染まっていようともその心はただ少年を母親の元に返してあげたいのだと

「ベストジーニスト君!!君の個性で捕縛してそのあとに個性抑制機を付ける作戦でいいかね?」

「N.O.が言うならしやうがないですね: 私もヒーローとしての行動はさせてもらいます: 抑える事に関しては私はプロですから」

「頼もしい限りだ!!さあ警察諸君今度こそ助けるのだ!!」

大きな声を出して沈黙してあ警察関係者の士気は上がっていく

しかし彼らは知らなかった この時既に悪党ことアクセラレータは対策をしていたことを

ところ変わつてとある漁港にて

周りには海を渡つて来たコンテナがズラリと並んでいる
その中で行われているのは

「お母さん……ん!!」

「ささつと歩け!!」

泣き叫ぶ子供達しかも手は拘束され目には目隠しをされている

「お家に帰りたいたいよー」

「ぐす・お腹空いたよ・」

「だまつてキリキリ歩け!!」

男は銃を子供背中に当てて歩行をさせる

「くそ!!これも奴のせいだ!!」

「悪党め我々の商売を邪魔するとは」

男達は子供達を売り飛ばし大金を手にしようとしたがとんだ邪魔が入る計画を変更せざる追えなくなった

悪党によって拠点を破壊され拳銃の果てに同志達を目の前で殺され

弱体化してしまい今ではとある組織の下っ端になってしまった

「まあ今回の仕事がうまくいけば我々はまた返り咲く事が出来るから我慢だ」
「すまない」

しかしそれは突如として崩れ去る　そう

「よオ　残党共オ……こつちから出向いてやったぜエ？　誰に手を出したか……」

これを気に悪党ことアクセラレータが世に広まる事件が公になる

とある力の使い方

「よおお 残党共オ!!こつちから出向いてやったぜエ 誰に手を出したか分かっているだろうなア!?ああ!!」

その場にいる武装した人々は恐怖した 奴だまた奴がきたと

「撃てー撃って撃って撃ちまくれー!!」

怯えながらもアクセラレータに銃を撃ちまくるしかし

キイイイン

それは無駄に終わり

弾丸はすべて相手に返っていき銃は粉々に分解される

「なんなんだてめーは!?!俺達の商売を邪魔しやがって」

「商売?これがー?なにふざけてんですかア? まったく落ちるとこまで落ちぶれて挙句の果てに恨みかよ... だから三下なんだよ」

「くそ!!こいつらが見えねーのか... って?ああ!?!」

「やるこゝろがいちいち三下なんだよ... 一流の悪党は三下の考え何ぞ手に取るようにわ

かるんだよ!!」

アクセラレータは既に動いていた 子供達を人質取ろうとしてナイフを突き立てるはずのナイフが

「ぎゃあああああ!!」

「おいおい うるせーなあ 殺されると考えてなかったのか… まあ殺されるけどな社会的にな」

男の肩にナイフが刺さり苦しんでるしかしアクセラレータは興味が無いように他の奴等を次々と能力でコンテナの壁に叩きつける

「がは?」

「うぐわ?」

「喜べよいいベツトがあつてよオ… 人間の体内には生体電気つてのがあつてよちよつと操作するだけでよ」

男達は戦慄した!!絶対に手を出してはいけない人物を怒らせてしまったということ
を

アクセラレータは男達の胸に手を当てる

「ぎやああああーあがががが!!」

「あひやひやはは：： まあこんな堅いベッドじゃ寝れねーかもつともこれから永遠の闇に染まるからよオ!!」

能力使い殺害すら問わない まさに裏の世界から恐れられる由縁である

ただ彼には美学がある

「まあお前らは捕まってもらわないといけないからな：：」

能力を止めて子供達に向かう

「ヒーロー?」

「いいやただの悪党だ：： そうただのくそつたれの悪党だ」

ガキン!!

アクセラレータは子供達の拘束具を破壊していく無論この惨状を見せないために目隠しだけは外さない

「お兄さんまた会えますか?」

子供の一人が助けてくれた人物に言う

「さあな・ガキは家に帰って寝る時間だ!!」

ぶつきらぼうに返答する

そおいつて彼は立ち去っていく

彼が立ち去った場所では

後から来た警察関係者や報道陣が事件の詳細を言う

しかも生放送で公に

「この度は人身売買組織に捕まっていた子供らを確保することができました」

この県の署長が対応にあたる

「今回の情報はどこからきたのですか？」

「それについてはノーコメントでお願いします」

コメントを差し控えるようだ

「せめて被害に遭われた子供達に一言お願いを」

「それはだめ．．」

「悪党が助けてくれた!!」

突如声が出る

そう悪党と会話した子供が

「僕達を助けてくれたのは悪党だよ!!」

「少年それは!？」

「今話題の悪党のことかな少年!!」

子供は更に言う

僕達は連れ去られてコンテナから移動されてる時に助けられたと

そして

「ガキは家に帰って寝る時間だと言って去っていったよ」

子供の証言にその場にいた大人達やテレビを見ていた人々に

そしてその肝心の人物はと言うと

「ああん？　なんで万年NO2のエンデヴァーさんがいるんだー？」

「見つけたぞ!!アクセラレータいやヴィランよ!!」

めんどくせーのが来たなー

折角のコーヒーブレイクを台無しにしやがって

若干逆ギレ気味になつてる少年と悪を滅すために活動する轟炎ヒーロー
まさに互いに火に油を注ぐ対決が始まる

とある油を注ぐ悪党の戦い？

「ああん？　なんで万年N02のエンデヴァーさんがいるんだア？」

「見つけたぞ!!アクセラレータイやヴィランよ!!」

めんどくセエのが来たなア

折角のコーヒーブレイクを台無しにしやがって!!

少年は目の前にいるのが誰もが知っている

そうヒーローランキング万年2位の轟炎をまとう拳で悪を制裁!するヒーロー

しかし少年は既に油を注いでいる

「貴様あ!!なんだその挑発的な言葉は!!いくら子供とは言え大人を舐めるのも」

「はいはい、まったくそのちよび髭が似合ってるじゃアないかアエンデヴァーさんよオ
!!」

少年は更に油を注ぐそお言葉と言う攻撃で

「ぐぬぬ!言わせておけば喰らえヴィラン　赫灼熱拳ヘルスパイダー!!」

「へエ万年2位の癖に器用な技使うんだなア？」

指から炎を糸状に放射された技がアクセラレータに向けて放たれる
しかし

「なんだ!? 炎が」

「いやア悪いなア!! 余りにも動きが直線なんでなア!!」

なんなんだこの少年の能力はまるで操作されているような

エンデヴァーは自ら放った必殺技がまるで自分の物ではないような感覚に

少年は向けられた炎を操りそれを

「そのまま返してやるからよオ!! 自分の炎を味わってみなア」

「なんだと!？」

馬鹿な!? 俺のこの技はそうそう返せる物ではない自身満々の必殺技は
少年がプロの技をいとも簡単に 自信を無くされるような感覚に 否

「舐めるなあヴィランよ 己の技なんぞ拳で解決するわあ!!」

ゴオオオ

右の拳に纏った炎を返って来た炎にぶつける
すると炎は相殺され

「ふんたわいもない さあ大人しく倒されるヴィラン」
「へエ器用なことできるんじやねエかよ、じゃあこいつアどうかッヨ!!」

俺はエンデヴァーに向けて手提げ袋に入ってた缶コーヒーを一つ取り出して蹴り飛ばす

個性を使って飛ばした缶コーヒーはエンデヴァーに向けて進む

「所詮子供か そんな子供騙しな攻撃すぐに蒸発させて・!？」

一直線に向かってくる缶コーヒーが突如加速する

咄嗟の判断でエンデヴァーは防御の構えを取る

「なんだこれは!？」

まるで落石をぶつけられたような痛みが二の腕に刺さる

「ぐううう!」

「どおしたア? 万年2位のヒーローさんよオ」

こいつどこまでも大人を舐めてる
殺してでも倒さなくては

エンデヴァーに芽生えるのはここで倒さなければいけないという感情に
しかしその考えを実行する前に

「エンデヴァー!」

「アアン?」

「ミッドナイトか!」

突如エンデヴァーの後方から新たなヒーローが駆けつける

確かあのヒーローは俺は思考する

「彼がアクセラレータなのね?」

「ああ、ここでやらなければ ぐ!」

「エンデヴァー!」

あーあ やめだやめだ いくら悪党でも援軍が来たのをぶちのめすなんて美学に反
するなア

「飽きた」

「はあ!？」

「ワリイナ!!こつから先は一方通行だア!!」

キイイーン

俺は足で地面を蹴りアスファルトを打ち上げる

「いけないエンデヴァー!?!引いて」

「くそう撤退なんぞしてたまるかあ!!」

ミッドナイトの声を無視してエンデヴァーは拳に炎を纏って飛んできた瓦礫を蒸発させていく

しかし

「つたくよオあきらめが悪すぎんだよオ万年2位さんよオ!!」

「黙れええええヴィラン!!」

怒りに身を任せてエンデヴァーは飛んでくる瓦礫を食らいながらも拳で前へ前へ進めていく

アアン?どおいう神経してんだこいつ 考えてねえのかア?

俺は更にもう一度その場で地面からむき出しになった鉄骨を

カアアン

拳で殴りそのままエンデヴァーに飛ばす

「エンデヴァーいけない!？」

ミッドナイトは腰に装備していた鞭をすぐさま取り出してエンデヴァーの身体に巻き付けてエンデヴァーを横にそらす

「何をやるミッドナイト!？」

「怒りで回りが見えてなかったかしら?」

飛んできた鉄骨が壁にぶつかり辺り一面に埃が舞う

2人は互いに状況を確認する

「くそ逃げられたか」

「そのようね」

二人を残してその場にいた悪党ことアクセラレータは突如消えていた

ミッドナイトは後から来たとはいえ少年がプロを相手に手玉に取ることに驚いていた

(エンデヴァー相手に挑発して攻撃を単調にさせて自分のペースに持ち込むなんてなかなか出来るものではないは、これは少し考えを改めないといけないわね)

これから先また遭遇するである悪党ことアクセラレータにどお対処するべきか考えるのであった

そしてその肝心な悪党は

グビ

空を見上げながらブラックコーヒーを飲む

少年は夕暮れの工事中のビル現場の最上階で買っていた缶コーヒーを続けて飲む

「あれが万年ヒーローNo.2のエンデヴァー…：そしてミッドナイトか」

少年は飲み終えた缶コーヒーを鉄骨の上に置く

「ククク… g o g i がいやアゴ苦労様ですねえエヒーローさん達よオ!!アヒヤヒヤ」

突如狂ったように笑い出す

「そうだよそれでいい悪党を倒すのはヒーローでなくてはならねエがまだ倒されるわけにはいかねエエエンだよオ!!」

ゴン

突如その場に組み立て済みの鉄骨に拳をあてる

鉄骨はしたの広場に落ちていく

そうすべては少年の策略計算による知名度アップという名の恐怖をヒーローに伝え

るための行動だったのだ

そしてそれが知らされる日が近いという事も

とある鹵獲作戦とヒーロー!?

ここに集まったのは今回の作戦に集まってくれた人々

警察 ヒーロー公安 そしてプロヒーロー達

ベストジーニスト リューキユウ ミッドナイト そして

「イレイザーヘッドわざわざすまない」

「いえ、オールマイイトに頼まれれば断るわけないですよ」

「ベストジーニスト、今回の作戦に乗ったの理由は？」

リューキユウは言う

「簡単な事だ抑制するためだ」

「ああそうなのね」

「そうそうたるメンバーね ほんとならここにエンデヴァーも」

ミッドナイトは検査入院しているエンデヴァーを気遣ってるが

彼女の手に余る案件だったから他のヒーロー達にも声を掛けたが

今アクセラレータという存在が世の中に知れ渡った今

各都道府県ではヴィランや犯罪者達が悪党という最恐の存在に感化され自ら出頭する者が後を絶たない

その処理に追われるのは警察や公安も手が離せないらしく

現在集まったのはここに居る五人のプロヒーローと一部の関係者のみ

「私が!!きたああ!!諸君この度はアクセラレーターいやトオル少年捕獲のために集まってくれて」

「「オールマイト!!」」

ドアを開けて登場してきたノーヒーローオールマイトそして

「この度はトオルのために動いてくれてありがとうございます」

御辞儀をして言葉を発するのは 今世の中に知れ渡った悪党の母親

「御坂美鈴さん？」

「どうして?」

「この件に関しては塚内君説明を」

「それでは現在アクセラレーターことトオル少年の状況について..」

「この場にいる者で作戦を考え行動に移すのはちよつと後になるが

その対象の少年はというと

暗い路地裏

少しでも歩けばそこは闇を覆い姿を隠し周りには疲弊した人々が身を寄せ合って生きていこうとしている

「ゴミを漁り食べる物がないかと浮浪者は

「今日も収獲なしか」

「痩せこけた大人は今にも死にそうな雰囲気を出している

「ここら辺もだいたいぶ落ち着いたとはいえない 悪党の影響か」

「オメエ… 腹減っているのか？」

突如浮浪者は後ろから声を掛けられた人物に

「ああ もう三日も食べてないんだ」

「そうかアじやあちようどいいや、これでも食つてなア」

少年が出したのはカード？

「これでどう使えぼ？」

「細けエことはイイ店に行けなくなつたからな 代わりに使つてくれや」

少年は浮浪者にカードを渡す

そして少年はその場を後にする

「若いのにすまない少年 この恩は必ず」

「そんなこと言う暇あつたらア飯食つてきなア!!」

立ち去る少年を見て 浮浪者からすれば小さなヒーローだと

しかし浮浪者はある人物と遭遇したことで

そこで光と闇の頂点の戦いが始まるとは夢にも思わないだろうが
後に浮浪者は語る

「世界の終わりだったかもしれない」と

とある都内某所にて

私はトオルさんと幼い頃家族の付き合いでいつもファミレスなどで会食したり遊ん

だりした場所をいつもビラ配りしながら情報を集めてる

「この子を探しますかどうかぜひお願いします」

声を出しいつも通りに人が行き交う場所で彼のビラを配る

(少しでも情報が入れば)

私は彼と幼い頃約束したことがある

「俺が悪党役なア!!」

「トオルくん・・・じゃあ私ヒーローね」

幼き頃私達は親が決めた許婚と言われて将来を決められた相手とはいえ最初はお互いに関係ではなかったがあの人はいつも私のために

「さてボクはなにをする?」

「出たわねヴィラン」

幼い頃よくヒーローごっこしたけど彼はいつも悪党役をしてたけどいつも最後は

「才子ちゃんは将来ヒーローになるの?」

「うん あたしヒーローになって皆を助けるの」

そんな幼き日の夢を想って約束しこのまま続けばと あの日までは

私はいつも美鈴さんのために一人で行方不明者のビラを配っている
そこにたまたま来た浮浪者が

「あれ？少年か」

!?

「え？トオルさんをどこで見かけたんですか!？」

「落ち着いてくれ!!この子になにがあつたんだ」

私は浮浪者の手を握り詳細を求める

「落ち着いてくれ今ここに行こうとしたんだ」

「このカードは・・・ファミレスインテリの年間会員カード!？」

私はこのカードを持っていることに驚いた

「これをどこで?」

「いやこのビラに映ってる少年からもらったんだよ」

更なる衝撃が私の中で走る

「生きていたのですねトオルさん・・・」

「腹減った・・・」

浮浪者からすれば腹を空かせた状態に加え少女の鬼気迫る対応にお腹は空腹の限界に近い

「ささ食事しながらどうぞこちらへ」

そしてその情報が

「この件に関しては塚内君説明を」

「それでは現在アクセラレータータクトオル少年の状況についてなんですが」

「才子ちゃんかたまたまビラ配りしてたらつい先日浮浪者がカードを渡されたと聞かされました」

「そこで私達警察はここ数週間のファミレスインテリの防犯カメラをチェックしたところ」

モニターに映し出されたのは

「これは三日前ですが朝の5時頃ですが」

映し出された映像に彼の姿が確認された

「おいおい朝からブラックコーヒーとステーキセットか?」

「栄養が偏っているな 制御しないと」

「こんな幼い子が?」

「周りを気にしてないな」

カメラから得る情報はあまりにも同年代の少年少女がいる時間帯ではない故に

「よかったあトオル生きていたのね うう」

「トオル少年のお母さん」

オールマイトは涙ぐむ美鈴の背中に手を乗せる

「大丈夫です 私達がトオル少年を必ずや母親の元に返しますので」

「トオルの事をよろしくお願いします」

「塚内くんなんかならんのかね？彼の行為は確かに度が過ぎてるが本来こちら側だ」

「私や上層部、公安の方でもヒーローにするべきかどうか賛否が別れてますが殺人を犯してるため正直これ以上もし事が大きくなると」

つまりチエックメイトの可能性がると

監獄行きかもしれないが少年ということでもまだ答えは出てないつまり

「タイムリミットがもうないといいたいなんだな塚内君」

「ええ その通りです」

「そんなまた離れ離れになるの？」

美鈴はまた倒れそうになる

「トオルさんのお母さんしつかり」

「まだ諦めてはいけませんわ」

ミッドナイトとリユーキュウは美鈴を支えるように肩を貸す

「なんとしてもトオル少年を救うぞ 相沢君 ベストジーニスト君この作戦を成功させ

るぞ!!」

「了解（まためんどくさい作戦だがN o 1からご指名だから終わったら寝るか）」

「さてどうしましょうか」

それぞれが少年のために動きを始める

だがその前に

「美鈴さんトオル少年の個性についてなにか心当たりがあるのでしょうか？」

「ええ 実は… 亡き旦那の個性は演算でした」

「演算？」

「ええうちの旦那はただ計算速度が速いってだけの個性で研究者向けの個性でした」

1 計算すること。演算。

2 数学で、ある集合の要素間に一定の法則を適用して、他の要素を作りだす操作。二数間に加法・減法を適用してその結果を出す二項演算など

一件たいした事のない個性だとその場にいる関係者は思う

「ですがトオルの現れた個性はそれを上回る者でした」

「上回るとはいつたい？」

オールマイトは聞く

「旦那が言つてたのはベクトルという言葉だったわ」

「え？ベクトルってなに？」

「ずっこのけながらもオールマイトは真剣に聞く」

「私も聞いたことない単語ね」

「ベクトル・・・つてたしか」

「ああそれつてもしかしたらベクトルを変換するつて奴じゃないすかあ？」

「「は？」」

皆が間抜けな表情しながらレーザーヘッドが言う

「相澤君詳しく!!」

「たしか学生の頃数学の先生が言つてた気がするんすよ」

そのまま続けてレーザーヘッドは言う

うる覚えながら作戦本部のホワイトボードに筋肉バカでも分かるようにマジックで書く

運動量・熱量・電気量 $e t c$ といったもののベクトルを触れただけで感知・変換する

「覚えてる限りだとこんな感じですね よくふて寝してたんで」

「感知系か」

「変換とな」

皆がはてなマークを浮かべながらも少年の個性について

「じゃあビルが動いたのは？」

「恐らくなんですけど向きを変えたとしかいいようがないです、正直少年の個性が強個性なのかどうかわかりませんが実験で更なる飛躍を遂げたかもしれないですね」

当時のテロリスト達の資料と照らしあわせてみてもなぜそおなったか？

謎は深まるばかりだが・

「よし！必ずこの作戦を終わらせて治安回復に動きますぞー！」

「ええ」

その場にいる皆がそお思っていたが

彼等はこの時少年がヒーロー達の個性を既に掌握済みだという事に

パソコンを見ながら少年は

「誰だが知らねエがア!! 飯食いに行けなくなつたからなア! アアン!!」

アクセラレーターことトオル少年は苛立ちを覚えていた

「俺を捕まえようと動き出したんだなア!?! ヒーローさん達よオオ」

ならば舞台を整えて野郎じゃネエカア!!

「g o g i g y a g i a a デエへへ、ちようどいいやアあそこで」

ドン

壁を叩きクレーターの後が出来る 少年の狂気はまさに最高潮に

とあるネットカフェの壁にクレーターが出来ていてそれが悪党の八つ当たりとは知られることはななかつたただの欠陥建築だということが判明したということは確か

とある戦いと願い

悪党と恐れられ、裏の世界では奴に目を付けられたら最後

死か絶望かどちらかの選択肢しかないが

東京のとある路地裏にて

「どうやらヒーロー達が君を嗅ぎ付けたようだな、アクセラレータ」

「ああ？めんどくせーなア！、まさか俺が通つてるファミレスまで手が回るとか、ご苦労なこつたア」

お互いに雑談をする

この男は、アクセラレータに依頼してヴィランや犯罪者などを私刑的な制裁を望む関係者のパイプをやっている

かつてアクセラレータがヴィランを瞬殺した時に、たまたま居合わせた経緯がありそこからの付き合いである

無論悪党が、まさかかつて行方不明者リストに乗っていた少年だとは知らずに

「君が、まさかあの事件の被害者だったのか。」

「ワリイナ、記憶がねエンダ！どうやらその事件の言葉が出ると頭がハイにナツテイクンデナア！」

男の失言は、少年のテンションをあげてしまう

「まアもつとも、これからこつちから舞台に出てやるからには派手に暴れてやつからヨオ！オメエとはこれで最後だ」

「そうだな。」

男は個性をもつて暴れるヴィラン達に憎悪を抱いていた、個性社会いわゆる超常現象によつて世界が変わり世に蔓延る悪に対して制裁を望んでいた

「こんな形でアクセラレータと最後の仕事だが」

「しけた面してんじやネエヨ、オメエが望んだ事だア最後までやり遂げろやア」

男は今回の仕事で、警察に出頭する気持ちで臨む

そして司法取引の材料も揃つてる

「私はこれから出頭するが、君に幸運を」

「ケツ！幸運も糞もネエンダヨオ」

強い口調で言いながらも、捻くれた言葉には少年なりの励ましの言葉だったのだろう

か

そして、彼らはお互いに別々の場所へと向かう

警察所にて

「あんたがアクセラレータに、依頼を繋いだ人物なんだな？」

「ああ、その通りだ」

取調室で警察の人に素直に証言をする男

「なぜ？、彼にヴィジランテみたいなのを」

「この社会になって、犠牲になった人々の無念はどこに行く？」

確かに、今の世の中は個性で溢れた世界でもあり差別もある

男は自分なりの持論を証言する

「ある家庭の遺族の話だが、ヴィランのせいで流産してしまい子を産めない体になった」
そのヴィランは子を宿した妊婦ばかりを狙い、世間からベビーキラーと言われてた奴
だ

「これから苦難もあろうが楽しみがあった、希望を奪われた怒りに対してあんたらはなにをしていた？」

取り調べ室内にいる捜査官達とマジックミラー越しにいる関係者達

この事件では、何度も犯人を追い詰めたが最後の一步で人質をとり逃げるのが得意
だった

「我々も全力で捕まえようと。」

「捕まえて檻に入れろと？甘いよ、それではだから私は」

男はこれまでの経緯を洗いざらい吐いた

そして

「これに今まで依頼してやった案件とリストがある」

「そうか」

USB端末を職員の前に出す

「あともう一つ。」

男がポケットの中から出した、手紙を受け取るそこには

「これは凄いわね」

「ええ」

ミッドナイトとリユーキユウは渡された資料を見て、驚きを隠せない
そこにあつた内容はどれも

「サーカスピエロ、フェイク、ネズミボーイ」

「ベビーキラー、準ヴィラン、悪徳トイチ」

リストに乗っていたのは男がアクセラレータに依頼して、

私刑させたヴィラン達のリスト

ページをめくる度に、嫌になるくらい私刑された者達が事細かに書かれている

「これを、あの少年が殺ったと？」

「私でもここままでやらないわ」

互いに資料をめくればめぐる程少年が過ごした、環境が裏の世界で恐れられるのも納得するしかない

「これは！、流石に我々警察でも対応しきれない程の相手をだワン」

署長も指名手配されていたヴィランですら見つけ出すのが難しいヴィランを瀕死の重傷にまで追い込む程実力を兼ね備えている事に対して

「公安の方にも手を借りたいがワン」

なにせ今、悪党という存在が広まり犯罪者達が自ら出頭するのが多すぎてその処理に追いつかないため人手不足に

「こちらもなんとか上層部にあたってみますよ」

公安の一人がスマホを取って連絡を入れる

「しかしまさか向こうから場所を指定してくるとは、何か意図があるのかだワン」

「少なくとも私は罨も想定して」

リユーキユウと署長は経験上の対応を言う

しかし

「私は逆だと思えます」

「逆とは？」

ミッドナイトは、少し前に少年とエンデヴァアの戦いを駆けつけた時に思ったのは

ひとつ 向かってくる奴には対応する

ふたつ 彼なりの美学がある

そして

「私は、トオル少年がそんな卑劣ではないと思ってます」

「なぜかね？」

考えられるのは一つ

「アクセラレータは、恐らく最恐というブランドを知らしめるといいう意図があるからです」

「最恐ねえ」

リユーキユウは腕を組みながら聞く

私なりに出た答えは、これだと思うが

「あくまでも憶測の域なので、今はその考えは捨ててください」

「ええ、今は指定された場所での対応を」

警察本部内で、これからアクセラレータ鹵獲作戦が説明されるそして

とある横浜貿易貨物ターミナルにて

「こちらα！応答願います」

「こちらβ 通信は良好」

機動隊員達が配置に着く

「こちらイレイザーヘッド、視界は良好ですいつでもいけます」

寝袋を纏いながらも指定の場所から視界が見える場所で待機している

「ミッドナイトそちらは？」

「問題ないは ベストジーニスト リューキュウ」

互いに配置を確認し、いつでも捕獲または鎮圧できる配置になっている
貨物の後ろには、機動隊員及び公安の方も来る相手を息を殺して待つ

「私がいまずトル少年の出方を見るからそれまでは待機してくれ！」

「オールマイト！、無茶だけはしないでくれよ」

「ハハハハハ！私を誰だとおもっている？塚内君」

「そお、ここに誰が思う」

No.1ヒーローオールマイトがいる

彼がいれば今回もなんとかなるだろうと

少し場の緊張が緩む

「オールマイト、今は」

「ああ！分かつているさ、トオル少年を救うぞ！」

カラアアン

物音が奥から伝わる

辺りに緊張が走る

足音が大きくなる

夜の月明かりに照らされてその場に現れた人物こそ

「ヨオヒーローさん達！わざわざこちらから用意した舞台に来てくれてよオ！」
最恐と言われ裏の世界で知る人はいない悪党が今現れた

「まだだ、今は動くべきではない出方を見るんだ」

「イレイザーヘッド視界に入ってるか？」

「問題ないです」

間違いなくイレイザーヘッドは個性を使って個性を抹消しているはずだが

「アア？なんだア、随分面白い個性を持ってんじやねエカア？アアン！」

どおなっている？、間違いなく個性は消してる筈なのに

イレイザーヘッドは、まるでなにかに阻害されてる感じがしていると認識

「トオル少年？君はなにを!？」

「あア．．．まったく随分とマア、狡い手で俺を捕獲しようとしてんだなア」

すぐさま次の一手がアクセラレータに来る

「ベストジーニスト君頼む」

「了解」

ファイバーマスターの個性で、少年を捕まえようとする

ファイバーが少年の周りを覆う

キイイイン

「あんたも器用な技使うようだが、それは無意味ダ」

少年は周りを覆う技に対して足元を蹴る

地面はえぐられ鉋物が真上に舞う

「なにをしたんだ？」

「べつつにイ、ただ地面を蹴っただけだ ああ？」

少年はつまらなそうに言う

「まさかこんなことで、俺を捕まえようしてんじやネエエエンダロウナアア！」

少年から発せられる声は、歴戦のヒーロー達とその場にいた者達が一步退くほどの威
圧感

しかし、そんな少年に向かっていくヒーローがいた

そう我らが象徴

「私が、君を救いに来た！」

今まさに最恐と最強の象徴の戦いが始まる

とある救いと狂気

「私が君を救いに来た！」

「へえ、N O O ヒーロー自らお出ましかあ？救いにだと舐めたこと言ってんじゃねえぞ」
いかん！怒りを出させてしまったか

オールマイトは、自分の言葉に少年にとって怒りのトリガーを降ろしてしまったのか
もしれないと

「アヒヤヒヤやってみろよ！N O O ヒーロー、オールマイトさんよオ」

少年は割れた地面を更に蹴り瓦礫を飛ばしてくる

「なんの！ T E X A S ^テ_キ ^サ_ス S M A S H ^ス_マ ^ツ_シ ^ン_ユ」

パンチを繰り出して、強烈な風圧出す瓦礫は少年の元に向かっていくが

「へえ？オモシレエ、g o g a g u だがあめエヨ」

「なにい!？」

オールマイトは冷や汗を掻いた

向かっていった瓦礫は空中に浮いたままその場に止まるそして

「ほらよ次はどうかな？ゲエへへへ」

カキイン

瓦礫と一緒に鉄骨を曲げて触れた一部を飛ばしてくる

「オーマイツガ!?!少年それは」

慌ててその場から猛ダツシユで離れる

「チツ、逃げ足も一流かよ!次はどうするんだア」

「ミッドナイト君今だ!!」

「了解」

オールマイトは逃げたのではなく、下がっただけ

ミッドナイトの個性、眠り香が辺り一面を覆う

「一呼吸しちやえばあなたは終わる」

「随分とまア、可愛い色した粉塵だなア」

「え?、なんで睡魔に襲われないの?」

「あアン?簡単だ、反してるだけだア」

ミッドナイトは驚いた、自分の個性で眠りが来る筈なのに少年はまるで効果がないと

「ふむ風は良好だな、で辺り一面は埃が上がっているよなア」

「トオル少年なにを？」

ヒーロー達は、少年がこれから喋る内容を聞いて戦慄した

「知ってるカア？粉塵爆破ふんじんぼくはつて奴を？」

「いかん！全員避難しろおお！」

「な!?!」

まさか!?

飛ばした鉄骨が貨物にあたり、するとそれが摩擦を起こし着火する

ドゴオオオオン

辺り一面が一瞬にして爆発が起きる

「皆大丈夫か!?!」

「ええ」

「なんとか」

ミッドナイトを抱きかかえながらオールマイトは避難

「なんて奴だ!、こちらの個性を利用してそれで爆破するなんて」

「ああ、なんて少年だ」

「こちらβ、なにがあつた？」

「こちらα、爆破の影響で貨物が倒れて援軍に行けません」

「了解αはそのまま救出チームが行くまで動かないように」

粉塵爆破の影響で、施設の周りに配置されていた機動隊員達が障害物のせいで援軍に
これず立ち往生

「ああ！よくもまあこの俺悪党に対して、つまらねエ対策したもんだなあ！」

まるで何事もなかったように、歩いて火の海から来る少年に

「「なんともないのか!」「」

他のヒーロー達は驚きを隠せない

「飽きてきたなあ…。じゃあN O Oヒーローさんオールマイイトさんよオ！」

「む？なにかね、トオル少年」

少年の言葉に耳を傾ける

「ふざけた遊びも飽きてきたし、ここで倒されてもらおうかア？」

「「な!」」

避難したヒーローや警察・公安達が驚きを隠せない

まるで今この場で平和の象徴を倒せると宣言

しかしその言葉に対して

「私を倒すだって? トオル少年よ、いやアクセラレータ! なぜ私がN O O I か知っているか?」

「ああん?、ただのマッチョな筋肉馬鹿で強いだけだろ」

「確かにそうかもしれない、だが私とて馬鹿ではない」

アクセラレータの挑発的な言葉に対して返す言葉は

「なぜなら平和の象徴なのだから!、いくぞアクセラレータいやトオル少年!」

「「オールマイト」」

気迫に満ちたオーラを纏い、辺り一面に圧が解き放たれる

そして最恐の少年はそれに対し

「おもしれえ、どっちが最強か決めようじゃないかア!」

2人はぶつかり合う

その言葉を後にして始まるのは、後に横浜の巷で語られる
平和の象徴が悪党を倒したと

ただし、それは本当の真実を知らない人々の語られる話
真実はもつと残酷に

とある祈りと最強と最恐

東京都内のとある豪邸にて

印照財閥の長女印照才子インテリサイコは、今敷地内にある礼拝堂で両手を組み

祈り想い人の帰りを待っている。

行方不明だった少年の安否が確認され、今その少年の朗報を静かに望んでいる
「トオルさん、お願いだからもうこれ以上は」

私は無事に、帰ってくればそれでいい

十数年いう歳月は短いようで長かった。

つい最近、彼と接触した浮浪者曰く

「無事に大切な人と帰ってくるといいな俺みたいな奴にはなるなよ」
「って言い
自らの後悔話もしてくれた

人は道から外れるとそこには深い闇しか残らないと言う。

路地裏とはいえ、進めば進む程暗い場所であり誘惑が絶えない

それでも

「才子ちゃん！ここにいたのね？」

「美鈴さん」

心配そうに声を掛けるのは、彼の母

私の世話役をしながら仕事している

「今は待ちましょう、あなたも私も」

「ええ」

2人は礼拝堂で祈って、待つ事しかできない

一方その頃、火の海化した某横浜では

「なぜなら平和の象徴なのだから！いくぞ！アクセラレータイヤトオル少年！」

「「オールマイト」」

「おもしれえ！、どっちが最強か決めようじゃないかア！」

互いに大地を蹴り拳を出す

「逝つちまいなア！」

DETROIT SMASH

拳と拳がぶつかり合う

オールマイトが、力を籠めて放つストレートパンチ

本来ならば少年の拳は碎けるはずだが

「君の個性は、どんな個性なんだよ！」

「さあな、自分で考えなア！」

逆に、オールマイトの拳から血が出る

「言葉の通り、君は私を倒そうとしているんだな？」

「だから何度も言わせんなア！」

次に少年が繰り出したのは地面を蹴り瓦礫を浮かび上がらせ私を的にするようだが

「甘いぞアクセラレータ！SMASH」

「はあ？」

この筋肉ダルマ！滅茶苦茶な事しやがる

無理矢理、瓦礫を押し戻しやがっただと？

「まだまだア」

「なんのお」

繰り広げられる攻防に、避難した関係者達はただ見守る事しかできないが

「あちらはオールマイトに任せて、今は立ち往生した機動隊員と火の鎮火を優先よ」

「ベストジーニストは障害物をどかしたら救出活動を」

「了解」

「リニューキュウは障害物の除去をそれからイレイザーヘッドは？」

「だめです、先程の爆発で頭から血が」

あれだけの爆破にも拘らず、死傷者はおろかけが人が

そんなに出てないのが奇跡に近いが

「俺は大丈夫です、もう一度アクセラレータに抹消を使ってみます」

なぜあいつに効果がなかったのか？を確かめるために、そしてそれがオールマイトの助けになるはず

「無茶はしないでね」

「先輩も」

ミッドナイトは、後輩に声を掛けてそれぞれがヒーロー活動をする。

辺り一面が火の海になっている状況でも

「オラア！くたばりやがれエー！」

「ハハハハやるではないか！アクセラレータ」

互いに一步も引かない攻防が続く

アクセラレータは、能力を使って拳を相殺してるが

更にその上を行くのが我らがオールマイト

「TEXAS SMASH」
テキサスマッシュ

「あぁん？」

拳をぶつけ合うが、持ち前のパワーでぶつかれば必然と風圧で飛ばされるのはアクセラレータの方だ！

コンテナにぶつかり

「ちっ！やるじゃねえか！」

何事もなかったかのように、もう一度大地を蹴りオールマイトに向かっていく

「嘘だろおい？結構私も自信を無くすぞ」

自分の信じる技を食らいながらも立ち向かってくる少年に驚きを隠せないだが、

「まだまだアイケるぜエノーさんよオ！」

「ク!?、一体どうすれば少年を救える…こんな時お師匠様なら」

思考するその一瞬の間を突かれ

「よお！戦いの最中に考え事かア？」

「しま・!？」

「ぶっ飛びやがれエ」

少年は大地を蹴り、瓦礫の塊をオールマイトにぶつける

オールマイトは、口から血を吐く

「がはあ」

なぜだ？ トオル少年よなぜ？ そおまでして反抗する

ぐっ？ 時間が！

瓦礫の塊をモロに直撃し、初めてのダメージを食らうオールマイト

「おいおい、こんなもんじゃねえだろ？」

テンションがハイになっていくアクセラレータ！

更に追い打ちを掛けるように

コンテナに手を当てる、するとまるで液体のように手が吸い込まれていく

「ほらよ！ サンタさんからのクリスマスプレゼントだア！」

「なんだと!？」

あんな細身の体で、どこにそんなパワーが

そんな考えが出てくるが

コンテナをまるで捨てるかのように投げつけて来た

「ちよ？これは洒落にならん」

オールマイトは次々と投げつけられていくコンテナをSMASHして止めたり蹴りなど入れてコンテナを破壊していく、時にはヒップアタックで相殺したり

「アヒヤヒヤ！随分と芸達者だなアノーさんよオ」

「君は、何がしたいのだねこんなことしてなんになる？」

コンテナが無くなり少しの間ができる、その答えに

「いいや、なにも？なあんも」

「は？」

「これだけは言えるぜエー、最恐になれば誰も悲しむことはねえんだよオ！」

少年は言う

それに対してオールマイトは

そうか！、ただ自己中心的な考えでぶつちやけいうならば己のわがままを貫き通す

「最恐になってなんになる？、君には母親がいるんだぞ」

「母親？誰だそれ？…グッ？」

なんだ！、トオル少年が苦しんでるだど？

なにが起きている？

そこに後から来たイレイザーヘッドが

「オールマイト！今です、今なら」

「待て！相澤君、苦しんでる下手に動くと」

なんだあれは？

周囲に黒い瘴気が覆っていく

「g o g y g a 殺 g a a g k o h a、なんだテメエ最恐の俺に親なんて」

アクセラレータは、両手を広げ黒い瘴気を圧縮していく

「何をする気だ？アクセラレータ」

「ああん？決まってるだろオ： 圧縮してんだよ空気をな」

圧縮してどおする気だ？

「そこに石炭粉と液体窒素を変換して、燃料を一次爆薬で加圧沸騰させるとどおなると

思う？オールマイト」

「私は生まれてこの方科学は苦手なんでね、詳しく教えてくれないか？」

「やばいっす！オールマイトあれは」

「簡単だア！さっきの比にはならない程の爆発だよ、ぶっ飛びなア!!」

イレイザーヘッドはまたもや避難行動を起こす

いかん！まだ鎮火活動している者達がいる仕方ない

爆発と同時に、オールマイトは空中に飛び

爆風の衝撃に対して取った技は

「Ok^(オ)la^(ク)h^(ラ)o^(マ)ma^(マ) S^(ス)M^(マ)A^(シ)S^(シ)H^(ユ)」

空中で体を急速回転させて、遠心力で自ら爆風を吸収する

するとどうだろうか？

爆風の衝撃は回転しているオールマイトの方向にしか行かない

「本当に馬鹿を通り越してばかなのか、No^(ノ)i^(イ)h^(ヒ)er^(ヒ)o^(ウ)は？」

「ハッハッハ、そのバカに挑んでる君も凄いがなトオル少年よ」

コスチュームは焼け、ボロボロになりながらも少年を救おうとしている、平和の象徴
アクセラレータは、筋肉バカに付き合っている気はないようだが

「さて、アクセラレータいやトル少年よ！君はプロを舐め過ぎた！」

「なんだア？まだやるのかいいぜエ、とことんやってやんよオ」

さあてまだまだ・!?

「いつだってヒーローは全力なんだ！」

なんだコイツア？

まだこの筋肉バカは本気じゃなかっただど!?

「ふざけやがって！舐めてんのはそっちだろうがア」

少年は大地を蹴りオールマイトに向かっていく

「少年よ知っているか？、更に向こうへという言葉がある」

オールマイトは構えを取り、向かってくる少年を見据えている

チャンスは一度きりだ、ここで止めなければまた少年は裏に染まってしまう

かつてお師匠様の知り合いの師匠が言っていた

「一撃必殺っていうのはだな」

うぶ、あまり思い出したくないな、何度実践訓練で喰らったもんやら

懐かしき修行の日々が今解き放たれる。

「トオル少年よ！これが最後だ!!」

「最後はてめえだ!」

一直線に向かつてくる少年に対して、オールマイトが放った攻撃は
「One ^ッshot ^{シヨツ} deadly ^ト smash! ^{マツ} ^{シヨ!}」

「ゴハア!!」

カウンター気味に入ったストレートパンチは、少年の顔面に刺さる
喰らった少年は地面に叩きつけられバウンドする。

先生、私は少年のために拳を入れましたですがこれは止めるために使いました。
罪悪感が混じりながらも少年との戦いに終止符を入れる。

「ハアハア、流石にきついな」

「オールマイト、アクセラレータは?」

正直もう活動限界が近いな、流石に私でもこれ以上は

「少年ならここについて!?!まだ動けるのか?」

「テメエ、よくも俺をここまでやってくれたな」

嘘だろ?、あんだけ直撃なパンチを喰らって立っていられるだと?

まずい!

オールマイトは満身創痍

イレイザーヘッドはすぐさま抹消を発動しようとするが

ドパン！

目の前で少年の頭から血が出たのだ

その場にいたイレイザーヘッドとオールマイトはすぐさま少年を確保する

「誰だ実弾を放ったのは？」

「こんな状況で狙う奴は…」

「相澤君今はこの場から離れてトオル少年をすぐさま病院に」

すぐさま行動を移す、重傷した少年を抱きかかえその場を後にする。

放たれた銃弾がこの先悪意に満ちた者の行動だったということ語るのはまだ先のこと

「ドクター彼の個性を…」

とあるカルテと少女

「相澤君、今はこの場から離れてトオル少年をすぐさま病院に」

なんとということだ!? もっと、トオル少年の境遇を考えれば!

彼を恨んでる組織は山のようにいるというのに

「これではトオル少年の母親に申し訳がない」

「オールマイト今は…」

オールマイトは、トオル少年救うと決めた! 母親に帰してあげようと

しかし、現実はあまりにも残酷だ

相澤君と移動しながらも

「ここから近い病院は? 塚内君」

「この場所からですと横浜大学病院!」

「距離は?」

少年は、頭から血が出ておりすぐさま治療が必要な状態だ!

「う・ぐ」

少年は苦痛の意識をしている

「なんとか意識はあるが危険な状態だ！」

「オールマイト！一応俺の捕縛用の布で固定救命具を臨時で」

「私の個性、繊維で出血を応急処置します！」

イレイザーヘッドは、固定具をその場で作りベストジーニストは個性で少年の頭の傷を縫う

あくまでも応急処置だ、本格的な処置しないと少年の命に関わる

「機動隊員の人達は？」

「こちらβ！ 全員無事です 誰も負傷しておりません！」

「！！！！」

トオル少年！君って奴は、本当に向かって来る者にしか手を出さないのか！？

機動隊員達は、捕縛の為に集まった人達だ！一方我々は彼を倒そうとしてたが

「これでは、どつちがヒーローかわからんな」

「ええ、やはり彼は私の憶測の通りの人物だったのね！」

ミッドナイトの憶測は現実に

だが

「このままでは痛みと出血が同時に来るかもしれないから眠り香で意識を飛ばします」

彼女は個性を使つて少年を眠らせる。

「…」

トオル少年は、そのまま意識が睡眠へと逝く

「リ्यूキユウ君たしか空を飛べる娘がいたね？」

「ええ今すぐ呼びます!!ねじれ聞こえた？」

プロヒーロー達は、少年を救おうと個性や人脈をつかつて：

固定された少年を運ぶ少女は、彼を見て

なんで！こんな私と変わらない子が悪に走るの？なんで？

少女の脳内ではマシンガントークを繰り返しながらも、指定された病院へと個性を使つて空を飛び少年を運んでる

「リユーキュウ!!こちらねじれ今病院に着くところです！」

「ねじれ!そのまま着いたら医者の方に彼の状態を教えてあげて」

「了解！」

ねえあなたはなんで！今まで暗いところにいたの？

彼女は自問自答しながらも今はヒーローとして行動する

「状態は？」

「弾丸による頭からの出血及び戦闘ダメージ 今は眠った状態です！」

病院についた少女は、少年を医者に届け状態を報告する。

すぐさま医者達は彼の状態を確認するべく迅速に動く。

そんな光景を見ながらもねじれは思う

「なんであんないい子が悪^{アクセラレータ}党なの？」と

彼女はリ्यूキユウからの報告を聞いて思ったことをただ言っただけかもしれないが、好奇心からなのか同情なのかはわからないが 後にビッグ3の紅一点と呼ばれる存在に成長

ただそれはちよつと先のお話

警察の方から連絡が来た！トオルが銃弾に撃たれたと

私達はすぐさま横浜大学病院行く

「トオルさんは大丈夫ですよね？」

「大丈夫きつと助かるわ！」

親友夫婦と許婚の子と一緒に車に乗り

急いで私達は、病院へと駆けつける

キキイ！！

駆けつけた病院で私は、

「すいません御坂美鈴ですが！！」

「トオルさんは!？」

「トオル君の容体は!」

それぞれが少年の安否を問う

「トオル少年のお母さん申し訳ない私としたことが!」

オールマイトは駆けつけた私達に頭を下げた

「なにがあつたのです？」

「トオルさんは今どこ？」

「今は緊急治療室で絶対安静が必要!そして非常に危険な状態です!」

担当医から話を説明を受ける

「そんな？」

「才子しつかり！」

才子の両親が倒れ掛かった娘を支える

私は息子の状態を聞いて驚愕する

トオルを撃った弾丸は脳の手前で止まり、今手術すれば出血からの危篤の可能性が高くなり手の施しようがないと言われ

「最悪の場合植物状態または昏睡状態の可能性も運がよくても。」

「そんな？」

担当医の説明を受け

私は母親としてなにも出来ないの？とそこで私は意識を無くす

「美鈴さん！」

「トオル少年のお母さん!?!」

病院内に動揺が走る

少し時間は遡り

運ばれてきた少年に対して

医者達はなんとか彼を救おうと処置を施す

ヒーロー達の応急処置と迅速な対応がよかったため命は繋いでるが

手術すれば命を失う可能性が高い

担当医も「手の施しようがない」、医者として救う事が出来ないというのは辛い

このまま少年を救えずただ時間ばかりが過ぎる

「手術をすれば間違いなく脳から出血！弾丸を摘出しようにも左脳右脳の間ダメージが残ります」

「場所が悪すぎる、メスを入れても摘出しようにもmm単位ですれば少年の脳は損傷する！」

「かといって手術しなければ少年の命は！」

病院の会議室では、少年に対しての処置をめぐる議論が続いている。

「先生！少年の関係者達が来ました！」

「そうか．．．とりあえず私の方から説明する！」

「わかりました、ですがまだ諦めるわけにはいきません！」

「医者に必要なのは諦めない心だ！」

担当医と院長は皆に伝わるように声を出す

「そうだ！諦めたらそこで終わりだ！」

「ああ、脳に詳しい医者を片っ端から連絡してくれ！」

「こっちは少年のカルテと状態を詳しくチェックだ！」

命を救うために、諦めない行動する医者達

ヒーロー達と変わりはない

「なにも出来ないの?と、私は病院内の椅子に座り横になっている美鈴さんを見て
「もっと私に救える個性があればなんでIQなのよ!」

大丈夫よ私達のお友達にも声を掛けて見るから

両親はトオルさんのために片っ端から連絡をしてくるようだ

「ただ待つてるだけじゃ救えない!」

なながヒーロー志望よ!私はただ

苛立ちと悲しみ交差する

「どおすればいいのよお!」

少女は胸にあったペンダントを握り壁に投げつける

壁に当たったペンダントが床に落ちる

するとそんな状況を見かけた小さな少女が

「お姉さあんだあいじょうぶ?」

「あ?ごめんね私としたことが」

「ううん、お姉さあんなにかあったの?」

小さな少女は私に声を掛けてくれた

「ありがとうね、お母さんは？」

「ううん、お母さんはいないけどちえんちえーはいるよ？」

「先生？」

不思議な言葉を使う少女ね

「そおちえんちえはすつごい医者よお！」

「そうなのね！」

「お姉さあんなにかあつたの？」

見透かされたように少女は私に言う

ペンダントを開けて言う

「私の許婚 トオルさん！」

「いいにやずけえ？」

私はなぜか彼と私の思い出を少女に話した

「うえええん、つりやかつたのですねえ！」

「ええ」

鼻水と涙が混じりながら私の話を聞いてくれた。

なんで？話たんだろうと思いつつも

「そんなにやことになって！」

「ほら鼻水！」

ちいいいん

私はティツシユを渡し、少女は続ける

「ちえんちえんならなんとかなるかもお！」

「ありがとうその言葉だけでもいいですわ！」

少女は言う

「スマホありゆますかあ？」

「ええあるけど？」

ただの同情からの行動なのか、それとも善意なのか

私は無意識に少女に渡した

小さな少女は操作する

ピポパ

トルウウ

「あ？ちえんちえん!! 今ね 助けて欲しい人がいるんでちゅ！」

電話先の相手と話す

「あいちあうひとをちゆくいたいんだってえ！」

この会話が、後に今世紀最大の執刀医コンビが誕生し後に後世に語り継がれる技術が受け継がれ脳外科の技術向上になったのは言うまでもない

そして現在

「ちようど今近くにフロッグドクターがいるそうで事情を話したら駆けつけるようですよ！」

「そうか！」

医者達はまだ希望はあると喜ぶが

「先生患者の様子が？」

「なんだと!?!」

緊急治療室では

「バイタル低下！脈に乱れが？」

「すぐに手術の用意を！」

少年の容体が急変した

「動き出したら脳に損傷が!?!」

「すぐに鎮静剤を！」

慌ただしく巡る室内

医者やナース達がなんとか持ちこたえさせようと処置を施す

「先生今フロッグ先生が着きました！」

ナースの声に皆が振り向く

「どれ、患者の状態は？」

「こちらが少年のカルテです！」

フロッグ先生と呼ばれる医者は渡されたカルテをみる

「これは凄いな！ 本来なら脳が死んでもおかしくない場所の手前に止まってるな！」

「!?!」

医者の皆が驚く

「彼の個性は？」

「えっとお確かベクトルらしいです？」

ほお？ベクトルとな

中々凄いなこの少年、撃たれる寸前に個性で押し留め

尚且つ精密に位置をダメージを最小限に

フロッグはこの少年が精密な機械な思考に驚くが

「しかし、私でもこれは手に余るな！」

「!？」

呼ばれて来た私でもひとつ手が欲しいな

「彼が日本にいればいいが！」

「彼とは？」

近くにいた担当医が言う

「法外な報酬を売りに命を救う、無免許医師と言えば？」

「まさか!？」

「法外とは失敬ですな、フロググ先生！」

「おや？君がなぜここに？」

現れたのは顔面半分色違いの皮膚をしている。

真つ黒なマントとスーツ赤いネクタイした人がいた

「ええ娘が、助けて欲しいってガミガミ言われて！」

「君に娘がいたのか？」
ブラックジャック B J 君

「むちゆめじゃないですか、お嫁さんでちゆ！」

後ろから現れた少女が不満になりながら言う

「ははは、好かれてるじゃないか！BJ」

「困った娘で！」

「だからあ、むちゆめじゃ」

緊急事態だというのに雑談する

そんな中

「まさかお前さん、執刀するんじゃないよねBJ?」

「なんだあばあさんまだ? ヒーローやってたんだ?」

「ばあさん」とリカバリーガールはBJに対して

「あんたが免許取れば法外な報酬要求で100%救える闇の医師ブラックジャック B Jがいなくなるのに!」

「あれが! 伝説の裏の闇医師! BJ」

「うむ、リカバリーガールとBJがいるなら救える可能性が増えるな!」

「あんたまさか?」

リカバリーガールは

「ふ、そのまさかだBJ君とリカバリーガールこの三人で執刀する!」

「なんだつてえ!」

「あちきも手伝いまちゆよ!」

「可愛い助手じゃないか! BJ」

「まさかその娘がBJ、あんた?」

少女の事を何か知っているリカバリーガールだが

「報酬はなしでいきましようか！フロッグ先生」

準備を始めるBJとフロッグ

「まったくとんでもないことになったもんだ、生きてるうちにまさかこんな大仕事があるなんて、ただし失敗したらBJあんた出頭してもらおうよ！」

「ばあさんも厳しい事も言いますねえ、こんな難しい手術を執刀できるなんて中々ないからね？」

「君の性格なら乗ると思ったよ！」

「さあ、器材を用意して15分後に手術を開始する」

医者とナース達がすぐさま準備を始める

「よろしいのでしょうか？」

「ああ責任は私取るよ、このフロッグ脳教授に掛けて！」

「名譽は先生に与えますよ？」

そして難易度が高い手術が始まる

少年の命は救う事は

とある回復とその後

カルテAの患者

手術の結果成功したが、脳の一部に欠損が見受けられる。

術後、少年の状態は酷い状態だった。

記憶障害言語障害運動機能低下という

人の手を借りなければ、歩くことはおろか食事もとることができない。

幸いなことに、フロッグ教授とリカバリーガールのおかげもあるがもう一人、彼の存在は秘匿だがこの三人の術式は、我々同業者でも驚きを隠せない方法で手術を行われた。

まず一人が切開し、脳に留まっていて銃弾を取り出す！

取り出す際に、患者の意識が落ち付くように自然回復をギリギリのラインで使う。

そして最後に、散らばった異物を綺麗に取り除く

ただでさえ一つのミスを許されない状況で、長時間の集中を必要とする内容

常軌を超えた技術と忍耐力が必要とされそれを目の前で、見れたことはいい経験になった。

「まさに奇跡だな！」

医者の方がレポートを見て言う

窓際から患者とその関係者が仲睦まじい様子？を見る

横浜で起きた事件は、世間では悪党がオールマイトに倒された！と大々的に報道され、容疑者の情報は一部除いて非公開扱いとなり国家権力やヒーロー達もメディアに対して沈黙を貫いている。

私は、彼が昔のように優しい頃に戻ればと思ったけど

「なんで、いつまで俺のところにいるんだあ？」

「あら、そんなこと言っつていんですか？」

「ちっ！」

俺はあの後ここに運ばれ、相当ヤバイ状態だったと自称許婚から聞かされた。

挙句の果てには、人の手を借りなくては動けない状態で自分で出来た事が暫く出来なかつたが

「そのデバイスがあつて動けるのはだ・れ・のおかげです？」

「くそが！」

自称許婚は「私のおかげですよ」と言ってくるだが俺は感謝はしている

首に付けられたデバイスを通して俺は、歩けるようになったがまだ完全ではない。個性が一応使えるが、こいつの目の前で使うとヒーロー達が飛んでくるしな

一応形式上俺は監視付きだが、ここの病院生活には充実はしている

「ああ！ またそおやって言うのですか、お母さまに言いつけますよ！」

「うるせえなあ！ ひとが寝てえのに、いつもまで入り浸っているんだああん！」

俺は寝たい！正直四六時中の監視は構わないが、こいつが俺の傍から離れねえのが気に入らねえ！

そんな光景が繰り広げられてる場所から見ている年老いたヒーローがいる

「俊典としのりお前の拳を破壊するほどの少年が奴か！」

電話越しに監視対象を見つめる老人

「ええ 私も正直ギリギリでした！あそこで使わなければどうなっていたやら」

「そうか」

俊典の奴は、我慢していたがわしが後から駆けつけて拳をつついたら

即座にレントゲンを撮り、両手拳が複雑骨折してることに気づいた！

「この馬鹿たれが！」

「ひいひい!？」

そんな光景を見た他のヒーロー達が、即座にオールマイトを検査入院させ

全治一カ月と診断され、暫くヒーロー活動禁止と言わなければならぬ程だった。

これを知ってるのは、あの日関わったヒーロー達のみだ！一応秘匿扱いになった

鍛え方には自信はあつたが、まさか俊典の拳をあそこまで追い込むとは！

「全盛期ではないとはいへ、あんな少年にお前が敗北寸前まで追い込まれる奴なんてなかなかいないぞ！俊典！」

「先生には感謝しかないです！こんな仕事を押し付けてしまつて」

ふん！まつたく久しぶりに電話をくれたと思つたら、この有り様と監視とか全くまあ家にいるよりはいいしな

「ただの暇つぶしになるからな！俊典分かつていると思うが、お前後で説教な！」

「ひいひい！先生それだけはご勘弁を！」

ピ

即座に電話を切る

俊典の奴め無茶をしておつて！

先代継承者に申し訳がないではないか！

かつて強大な敵に立ち向かい、次のヒーローに繋ぐために託された思いを無駄にしたくはない「次のヒーローは君だ！」

全く、アヤツもとんでもない置き土産をしてそれが無くなる寸前まで来てたとはな

「まあ俊典にもいい葉になつたらう、あつ？たい焼きがねえか買つてくるか」

その場を後にする

そのヒーローの名はグラントリノ！

「空気の力で高速移動巨悪を追い続ける熟練ヒーロー！」

暗黒の時代から今現在まで生き残って活動している数少ないヒーローそして
オールマイトの師匠であり志村菜奈のバディであり盟友。

「あれがアクセラレーターと御坂トオルか」

老人はその場を後に、たい焼きを買いに行くのであった。

とあるリハビリと少年の新しい日常

あの事件以来俺は病院で入院生活という、名の寝床で過ごす日々が続いてる
毎日飽きもせず来る才子から逃げるように、俺は今秘密の場所で

グビ

「やっぱこれだなー！」

少年は缶コーヒーを飲み、建設現場のむき出しの鉄骨の上で飲んでいる。

彼にとって、この瞬間が唯一の安らぎである。

少年は手を空に向けて、目の前に浮いている飛行船に個性を使う。

「ちっ！」

やっぱだめか！、こんなポンコツになってデバイスに頼らないといけない体になっ

か

つくづく苛立つぜ！

少年は缶コーヒーを置き、首から下げているデバイスにスイッチを入れる。

下に向かって少年の体は落ち始める

数十メートル上からも付けずにそのまま落下すれば、少年の体は普通だったらぺしゃん

ここになるがぶつかかる寸前で、

「ハッ！」

個性を使い着地する。

するとどうだろうか、反動で風圧が噴水広場で起きる。

「きや♥」

「うおおなんだあ？」

一般人は突如強風が来たと、それぞれが普通の人としての行動をする。

少年は杖を出し、ゆつくりとその場を後にする

そんな行動を監視しているヒーローが言う。

「全くヒヤヒヤするガキだ、自殺志願者かと思えば能力把握かよー」

ご老体は少し離れたところから監視対象を見つめてる。

あんな状態で個性を把握するためにわざわざ病院を抜け出すとは？

まったくヒーローになればいいと思っただが、

だが境遇がそれを許さない！

少年を狙う奴等が山ほどいるために

「公安委員会も変な事しなければ、わし直々に鍛えたのに！」

残念そうに監視対象を見つめる瞳には

これから先、少年の生活の無事に過ごせることを切に願う

少年は病院の廊下を歩く

通りすぎる少年に対して、他の病室の患者達が端に寄る

恐怖からなのかそれとも邪魔するなどと言わんばかりに道を開ける

杖を使いながらも少年は歩く。

「ああ！トオルさん」

「なんだあ？」

「今日は定期健診なのにどこに行ってたのですか？」

「うるせえな、どこだっていいだろ？」

またこいつかあ、いつもいつも懲りずによくもまあ来るもんだ！

少年はウザったい少女に対して反発的な言葉で言う

「いいですか？、あなたはまだ病み上がりなんですよそもそも病室抜け出すなんて」
「べらべらと喋りやがって、耳に響くんだよお！」

そんな光景を他の患者は見ている

他者からみればお節介している女の子に対して少年は邪魔だと思ってるが、

「あら？、トオルちゃん才子と一緒になの？」

「トオルさんのお母さま！」

「めんどくせえのがまた来た」

なんでタイミングの悪い時に親が来るんだよ！

「誰がめんどくさいですって？」

「あんただよ、ババア！」

「トオルさん、実の母親に対してそれは？」

少年は親に対して反抗的な言葉で言う

「まだこれでもびちびちの30代よ！」

「そんなこと言う時点で十分ババあだあ！」

「もうなんでいつもこおなるのよお？」

親子の口喧嘩が始まる、才子は両者を落ち着かせようとすると、これが定期的に行われている日常会話である。

検査室にて

「さて来たね」

「けっ！いちいち言うの嫌味を言うのかよ、ヤブ医者さんよお！」

室内では少年と医者のお話で始まり健診が始まる

頭の包帯を取り、医者は少年の頭に手を添え状態を見る

少年は黙ってる

「問題ない感じだね、包帯はもう必要ないようだ！」

医者は外した包帯をゴミ箱に捨てる

「そうかあ、じゃあもう行つていいか？」

「まあ待ちたまえ！」

「ああん？」

そお言つて医者は語り始める

「君は脳にダメージを受けて、更に脳の一部欠損及び言語機能運動機能計算機能更に記憶障害がある！」

少年は背中を向けながら黙つて聞いている

「しかし脳はいまだに未知の部分がある、情況によつては君の致命傷になるかもしれないねえ！」

「脅してえんのか？」

「僕は、自分の患者を持つているわけだし尚且つ最後まで責任を果たさないとね」

「気に入らねえな！」

互いに売り買い文句的な口調で雑談し合う

だが、少年はもう一度椅子に座り医者と対面する

「君の名前とこれまでの経歴を言いたまえ！」

「悪^{アクセラレ}党！、かつてとある機関で非合法な実験により個性を鍛えた少年だった！個性はベクトル操作 運動量・熱量・電気量 e t c といったもののベクトルを触れただけで感知・変換する。そして横浜の一件でこんなデバイス頼らなくてはいけないほどのポンコツに成り下がり今に至るってわけだ！」

「うむ、上出来だね！ただ君は記憶にリミッターが掛けられている感じだがね？」

「ふん！知るかよ、全く飽きもせず来る親と才子にこっちは迷惑してんだからなあ！」

医者と患者は会話をして

「とりあえずなにかあつたらまた来なさい、いつでも見てあげるよ！」

「あいにくそんなつもりもねえからなあ！」

少年は立ち上がり部屋から出る

立ち去った少年を見て医者は

「彼の脳にリミッターを掛けた理由はわからないが、恐らく個性に関する事だとは思
が。」

脳に手を加えた実証実験はあまり聞いたことがないが、彼にとってなにもなければいいがまあ僕の患者だし最後まで見てあげましょう！

「次の方どうぞ」

医者は普段通りの仕事にはいる

少年は、定期健診を終えて自室に籠る

ただベッドの上で横になる

フン！俺がまさかここまで、ポンコツになるとはなあ。

自分の今の状況をあいつが見たら、どお言うだろうかきつと

「よお生きてるじゃねえかー」と言うだろう。

だがあいつは、あの日出頭し今では檻の中で暮らしていると聞いた

なんでも情報を提供し取引を持ち掛けた

今までぶち殺した犯罪者と依頼を持ち掛けた人物及び組織の情報

いわゆる司法取引をして檻の中で待遇のいい場所で過ごしているようだ。

まあそのおかげで俺にも情状酌量が入り

監視対象扱いで済んだのは意外だった

未成年がオールマイトと戦える時点でおかしいがな！

俺が眠っている間に、世の中はそれでも動いていた

まず俺の事に関してはおの事件の関係者は皆沈黙を貫いているようだ！

まあ悪党がまさか高校生にもならない少年だという事、そしてオールマイトの拳にダメージを与える程の人物 特徴は白髪で紅い瞳

世間から見れば相手は暗黒時代のヴィランだと思っただのだろうか！

過去のヴィランの特集やヒーローの話がピックアップされ

今に至るわけだが

「てめえは、いつまでいる気だあ？」

「あなたが変な動きをしなくなるまでですわ！」

許婚らしいがこいつあ本当にウザったい

俺がまたなにかやらかすのではないかと学校が終わればいつもここに来る

今日はたまたま短縮授業だったらしく俺が病院から抜け出した事に関してもしつこく追及してた

「健診の結果は？」

「あぁン？いちいち報告しなくちゃならねえのかよお、この数式オタクが！」
本当にウザッてえなあ！

「誰が数式オタクですつてえ？」

「オメエだよ！、個性IQなんてただの数式オタクが使う個性じゃねえか？」

まるで夫婦漫才のように口喧嘩し合う。

そんな光景を、ドア越しから見ている人がいる

「ふふ思った以上に仲がいいようだ」

「あら？、あの人の子よ昔よくあの人の口喧嘩あんな感じだったし！」

「止めに入らないか、妻よ！」

「それは野暮よ」

美鈴と親友は男に向かって言う。

もう一度お互いを確かめ合うためだと！

なおこの口喧嘩は外にも響いたため、途中で止められたが

止めに入らなかった親御さん達はこっそり看護婦さんから説教を喰らったようだ。

だが、少年に恨みを持つ悪意が途切れることはない

「我が組織の復活の為に、アクセラレータを倒す！」

「イエツサア！」

少年の新たな戦いが始まる！

とある提案と忘れ物

ヒーロー公安委員会から呼び出しを受けた少年は建物の前に立つ

「俺を呼びつけるなんて気がおかしいのかあ?」

「トオル!、今のあんたがいるのは公安さん達の働き掛けのおかげよ!」

はいはい　なんで母親までついてくるんだよ

向こうから一人だけで来てくれと、手紙を受けたのに

「アクセラレータですね、公安部長からお話は聞いております!」

「ああん?、幹部自ら俺に用があるのかあ?」

「親御さんは、こちらにどうぞ」

お袋はどうやら別室に移動されていったようだ。

きな臭い話がありそうだが、ろくでもねえ内容だったら俺あ帰るぞ!

案内された部屋に着いて、俺は椅子に凭れ掛かる

「で!この俺になんの用だあ公安さんよお?」

「まあ待ちたまえ、今から君の処遇に対して結論が出たんだよ!」

ん？どういうことだ？、司法取引で監視対象で済んだはずだろ！
まだなにかあるってことか、

あれだけの情報提供をしたのにまだ足りないってか

まあ、檻にぶち込まれるぐらいならひと暴れして入るのも悪くないが

少年は思考を巡らせながらも処遇について聞く姿勢を取る

「やあ待たせたね！一応公安委員会代表で私が来たわけだが、結論からいうとだな？」

お偉いさん曰く、俺の個性に興味を持ったらしい

民間協力を依頼したいらしいそうだ。

個性を使うにも、無断で使用すれば捕まるしかとって俺を抑制するにも現状では誰も止められないそうだ。

公安委員会は逆に民間協力者として扱えばいいと

つまり公安の犬になれと、

「てめえらの犬になれってことか？」

「結果的に言えばそうなる、未成年の協力は本来ご法度だが君の力は絶大だ」

なるほどなあ

要約すると俺の個性でヴィラン共を捕まえろと言いたいわけだ

「一流の悪党に相応しい仕事じゃねえか！」

「応じるか応じるなら君の待遇も良くしてあげよう！」

少年の答えは決まっている。

マジックミラー越しに見つめるヒーローがいる

「シャチャョー、とんでもねえことに！」

「フン、なにを慌ててるたかだが少年如きに！」

「だって、シャチャョーあのオールマイトの拳を壊す程の実力者ですよ？」

たしかにな、危険過ぎるが今は民間でも協力者は欲しいとこた

あの事件以降、ヴィラン共が活性化して人手が足りない

「世も末だな、あんな小僧の力を借りるとは？」

ギヤングオルカは少年を鋭い眼光で見つめる

視線を感じたのか、ミラー越し少年はこちらを見ている

「随分とプレッシャー掛けるんじゃないやねえかヒーローさんよお！」

「!？」

本当にあれで未成年なのか？

ギヤングオルカは少年のプレッシャーを感じた

「間違いなく奴は波乱を呼ぶ！」

この先起きる戦いの渦に巻き込まれると

少年と公安との話が終わり

「トオル、どんな事言われたの？」

「ああん？、悪いが秘匿扱いだから親御さんにも言うなつてことだ！」

「事件の事に関してなのね？」

「さあな」

息子と話した方はなにを伝えたのかしら？

そんな思考しているうちに

「悪いが俺は野暮用があるからババアは置き去りだ！」

「ちよつと？トオルどこにつてきやあ！」

俺は個性を使つて大地を蹴りビルの屋上へと着地し

その場を後にする

「勝手に個性使つたらヒーローに捕まるわよお！」

我が息子ながら自分勝手過ぎる本当になにを話したのやら

親として気になるとこだけど後ろから声を掛けられる

「あんたの息子さんに協力したいんだとよ！」

「グラントリノさん？、どおしてここに！」

説明を受けて一応個性使つていいということまではいいらしいがそれ以上は何も聞けなかった。

なにもなければいいけど、心配だわあ

「はあ！」

ため息しかでない母は彼を見つめる事しかできなかつた。

とある学校にて

ここ聖愛学院に通う生徒はいずれも超が付くお嬢様達の女子校である。

政財界や著名人の子供らが通う

セキユリティ対策は最高レベル、ガードマンと引退した元ヒーローが警備を勤める
出資者や投資家達からの資金提供で成り立つ。

授業内容も超が付くほど

社会マナーや情勢、女性としての知識やノウハウを叩き込まれる。

そんな超が付く学校に通う一人の女性が

「才様ー、おはようございますー！」

「ええ、おはようー！」

「きゃああ才様ー！」

「いつ見ても美しいわあー！」

、同学年から声を掛けられれば応える少女

上級生からは、親しみを込められた挨拶が来る

彼女が声を掛けるだけで、同姓が気絶したりミーハー達が集う

「皆さま、今日もよろしくお願ひしますー！」

次々と目を♥にして倒れていく

これだけ彼女は人気があり、尚且つ博識でもあるから

「いけませんねそのあなたー！」

「はいー！」

すぐさま才子は倒れた女子に手を差し伸べる。

「これがほぼ毎日

「ちやんと朝飯は食べまして？」

「才様、こんな私に手を差し伸べるなんて感激です！」

周りからは嫉妬目があるけど、少女達はそんなピンクの空間を見て

ぞくぞくしている

「キマシタワー！」

「才様に対応されてみたい！」

「今日のおかずよおー！」

百合空間の出来上がりである

しかし、そんな空間をぶち壊す奴が来る！

ドゴオオン！

「きやああー！」

「風があ？」

着地と同時に声を掛けられる

「よお才子！忘れ物だ！」

「トオルさん!?どおしてここについて、セキュリティは？」

少年は、才子に忘れ物を渡す

「そうよ、ここは最高レベルのセキュリティがあるのよ無断で入ることは？」

「ああ、あれかそんなもんぶち破って来た！」

「へ？」

才子は間の抜けた表情をする。

「ちよつと待って、今なんて言った？」

「あんなもん俺にとつては玩具みたいなもんだ、操作すればいつでも入って来れる！」

「いやいや、簡単に入って来れるって！」

「個性無断で使用したらダメなはずでは、

と才子は思考する

「ああ、一応個性は使っていない事になったからなあ！」

「そうですかあ！つてええ？」

「会話しながらも情報を整理する

つまり今のトオルさんは

無断で学内に来た

←

セキュリティを操作して突破した

←

個性使用許可を貰ってる

才子は思った、これってまずいのではと

そんな思考をよそに更に空気が変わる。

「勝手に許可なく入るって考え俺は好きだぜえ、悪^{アクセラレータ}党いやガキんちよ！」

「なんだあてめえ？」

よりもよって好戦的なヒーローの授業体験日なのよお！

最悪過ぎる組み合わせですわ！

才子は今日の授業担当者が、彼にとって最悪な組み合わせだと

そこに現れたのは、蹴っ飛ばしぶっ飛ばす 孤高の道を行く勝気なバニー！！

歯に着せぬ言動は 己の強さへの自信ゆえ

危険を顧みず孤高の女性ヒーローその名は！
ミルコ！

この出会いがもたらす物とは？

とある孤高と元最恐

私はいつも思う、トオルさんってトラブルばかり持ち込む体質があるんじゃないかって

彼が移動する先でいつも何かが起きるし、かといってお節介すれば煙たがれるし

「さてと、アクセラレータ！お前とは一度戦ってみたかったんだよ！」

「どっかの馬鹿が、俺の事話したのかあ？」

会話を聞く限り穏やかに済みそうではないむしろこの雰囲気からして

「ちよつと待つてください、ミルコ先生！」

「おい、お前名前なんて言うんだ？」

「邪魔すんじゃないぞ才子！」

だからトオルさんなんで？

「才子って、あの印照家具メーカーの嬢ちゃんじゃねえかハツハハ！」

「私のメーカーをご存じで？」

「おうよ！、丁度いい寝具があつてついこの前買ったばつかでああ！」

「はあ、そうですか？」

ミルコ先生は大雑把に言う

「もしかして、このガキんちよお前のこれか？」

ミルコ先生は薬指を立てる

「ええ、一応許婚ですわ！」

「ん？、ちよつと待て」

「てめえ！俺を差し置いてなに喋ってやがるんだああん？」

場に沈黙が走る

周りにいた女子生徒たちが声を上げ始めた

「「ええええ！」」

「才様の婚約者フイアンセワですってえ？」

「もしかして、行方不明になっていた人って？」

校内にどよめきと悲鳴が走る

ある者はシヨックのあまり膝をつく一方で「これはスクープですわあ」メモを取った
り

色々な反応が交差する

「すごい不良ですわね、でもまたそこがイイ！」

「才様が根気よく病院に通って、見舞いに行つて更生させようとしている御方が」
「でも考えてみなさい、最終的には結ばれるために」

「「キヤアアア♥」」

なんなんだこいつらは？話がごちゃごちゃしてて

俺が置いてきぼりにされてる感じじゃねえか！

「ハツハハア！ こいつあ驚いた、まさかエンデヴァーに膝をつかせた奴が才子の許婚とはな！」

「もうミルコ先生！」

恥ずかしそうに両手を顔に当てて赤面を隠そうとする才子

ミルコはお構いなしに話を続ける

ん？、なんで万年2位のエンデヴァーが出てくるんだ？

もしかしてこいつ

「なんでかって？そりゃあおめえ、直接エンデヴァーから聞いたんだよ！」

「けつ随分と好戦的に言うじゃねえか！てめえも膝を付かせてやるかあ？」

校内の雰囲気はもはやピンクなのか戦闘色なのか色々と入り混じってる

「トオルさん、そんなミルコ先生もってもうどうしていつもこうなのよお！」
才子はトラブルを持ち込むトオルに対してどうかしようとしても、ミルコがそれに
対して挑発して一色触発状態に

「よおし決めた！」

「ああん？」

ミルコ先生が突然言い始めた

間の抜けた表情をするトオルさん

「一限目は、生意気なガキンちよを更生させる授業に変更だ！」

「はっ？あのミルコ先生！」

「おもしれえ冗談言うじゃねえかあ？なんなら露出狂なお前をボコボコにしてやるぜえ
ウサギさんよお！」

突如決まった授業内容、というより実戦形式じゃないですかあ！

「2人とも、落ち着いてください！」

私が落ち着かせようとしても

「引っ込んでろー！」

と威圧され、もはや二人の衝突は避けられない

「気が合うなガキンちよ！」

「オメエを倒すのは簡単そうだなあ！」

あのトオルさん、一応相手はプロですよそんな簡単に

「こちとらいつでも死ぬ気でヒーローやってんだ、ガキンちよに舐められたまま終わるかよ！」

「この変態コスチューム野郎がア！」

風が吹き荒れたと同時に二人は大地を蹴り

拳と脚がぶつかり合う

ドゴオオン！

「へえやるじゃないか？ガキンちよ！」

「ただの変態コスチューム野郎じゃねえな！」

繰り返された初撃を互いに褒め合う、その言葉を気に次の攻撃を繰り返す

「踵月輪」
ルナリング!

「脚技が得意な奴かあ、こつちこれだあ!」

トオルさんは地面を蹴り、大地を押し上げる

「おお? すごいなガキんちよ!」

「ちつ!、速さが売りかただの変態コスチューム野郎ではないな?」

「言つただろう、あたしにはミルコつて名があるんだつて!」

「そうかよお!」

売り買い文句を言いながら互いに次の攻撃を繰り出す

ベクトル操作で押し上げた瓦礫をミルコ先生に向けて放つ

「ガラクタ三号行つてこいやア!」

「はは・ すごいなお前!だがそれくらいどおりやああ!」

瓦礫をミルコ先生に放つたトオルさん、それに対してミルコ先生は真つ正面から向か

い
「月墮蹴」
ルナフオール!

かかと落としな蹴り技で瓦礫を粉々に粉碎する

「おいおいマジかよ? 瓦礫を脚だけで粉々する奴がいるなんて、いやいるかあの馬鹿み

たくー！」

「物を使う時点で弱虫め？」

「あぁん！」

ミルコ先生は挑発的な言葉で、トオルさんを挑発する

「お前こそ、手を使わない時点で脚が無ければ弱虫だろうによお！」

「ガキんちよのくせに、いっちょ前に言うじゃねえか？」

ヒートアップする戦闘

私はただ見ていることしかできないのかしら？、と思つてたら

「ソコマデダア！ミルコ！アクセラレータ！」

「なんだあ？」

突如大きな声が広がり、校内いた女子生徒達は耳を塞ぐ

その声の持ち主が現れた

「お前らあ2人！、そんなに遊びたければUSJでヤレエエエ！」

「くつうるせえなあ！プレゼントマイク、今良いとこだったのによお！」
「なんだあいつあ？」

あれはプレゼントマイク先生！どうしてここに？

戦闘の途中に、邪魔をされた二人は声の方向に目を向ける

「まったく次から次へと、問題持ち込みやがってえ特にアクセラレーター！」

「だからてめえ、誰だって言ってるんだよお？」

トオルさんは邪魔をされ苛立ちを隠せない様子

出来れば、ここで収まってくれればいいけど

『俺の名を知りたいかあ？エヴァバディセイハイ!!!』

突然言い始めた

あの先生、今ここで言うのですか？

「大爆音ヴォイスの宿り主！ 見えない武器でイヒョーを突く!!」

ラジオDJに実況解説 リスナーを楽しませるエンターテイナー ことは俺のこと」

「その名はボイスヒーローだあ ヨ・ロ・シ・ク!!」

拡声器をフルに使い名前を言う

そんな大きなボイスで近所迷惑を顧みない媚びない引かない先生に対してトオルさんは

「ただの大声バカかあ?」

「うっは、リスナーは厳しいなあっておい! アクセラレーター勝手に無断侵入及び器物破損本当だったらとっ捕まえて留置所にぶち込みたいとこだがああ?」

「興が削ぎれたな、ガキンちよいやアクセラレーター!」

「ああ同感だ!」

「ちよ? お前ら人の話をキケエエヨオ!」

なんかプレゼントマイク先生が哀れになってきたわ

2人は戦闘を止められたあげく飽きたようだ

「ミルコオ、お前今日は生徒に授業を教える日だろうがあ!」

「まあ堅い事言うなちようど更生と言う名の実戦やってたわけだし」

「そんな授業聞いたこともねえぞお!!」

呆れた感じで、マイク先生とミルコ先生は雑談している

「ちつつまんねえなあ帰るか！」

トオルさんは飽きたようでその場から個性を使って立ち去る

「あ！ちよつと待って、トオルさん！」

「アクセラレータ、またやろうな！」

「アクセラレータどうすんだよこれ？、また俺がどやされるぞこれえ!!!」

それぞれが声を掛けるが、彼に声は届かない

校庭は荒れ果て、セキュリティ対策は見直されことになったのは言うまでもないが
彼が素直に来た時には顔パスで通れるようにした

この時の修繕費用を払ったのは、No.1ヒーローのポケットマネーだったと
暫くもやし生活を送っていたそうだと周りから聞かされた

「ハハハハ若いつていいねえ！、先生もひとつどうですかたい焼き？」

「この馬鹿たれがあ！」

「ゴハア!?先生！」

とある事務所では説教＋お節介の日々が続いた

ちなみに、才子が忘れた物は生徒手帳手帳の為に届けただけでこの騒ぎ

後日 そのことを知った美鈴は暫く聖愛学院の食堂で奉仕作業して学院にお詫びをしたそうだ

問題を起こした張本人は

「寝るか・ZZZZ」

病室で優雅に寝てる

とある設定資料

本作主人公オリ主本名 御坂トオル

裏の世界では悪アクセラレータ党とヴィランや犯罪者から恐れられ、

仲介役から依頼を受け悪を断罪していく

個性 ベクトル操作（触れた物のベクトル（向き）を変換する能力）発動型

運動量・熱量・電気量 e t c といったもののベクトルを触れただけで感知・変換する。

普段は「反射」に設定されており、自身に触れたあらゆる攻撃を反射する

黒い翼（白い翼）

今後の物語の進み具合で出てくる

黒い方の出し方は今模索中だが、白い方はまあ演出的にどお出すかで悩み中

暴走は出すよちゃんと

原作介入前後←（今この辺）

悪党であったが、とある事件がきっかけで脳が損傷。

一時的に個性が使えなくなり、そのまま一般人になるところを才子が

開発した補助デバイスのおかげで個性が復活！

事件をきっかけに、彼女に恩を感じ借りを返す返さないの関係

再会した時は、昔親同士が決めた許婚が才子とは知らずただのウザったい女として認識
(アクセラレータはウザったいと思ってるがただ内心気にしている) ツンデレか？

みさかみすず
御坂美鈴

30代後半に入ったトオルの母親

見た目はそこの学生さんより若い(よくナンパされるが指輪を填めてるので)

夫とはトオルが赤ん坊の頃に他界し、シングルマザーとして奮闘

事件がきっかけで、再会するまでヒーローや公安・警察関係者に息子の情報収集して
た

印照家具財閥の親(親友)とは、家族絡みの付き合い

仕事は才子の教育係(本当の娘のように可愛がっている)

親友とはいい関係であり親友の娘である才子のことはいずれトオルの「嫁に来ない？」って程

互いの家族同士で許婚を決めた程

再会した時、言われた一言で暫く立ち直れなかったようだ。

「ババァー」本人も堪えたがめげずにトオルを更生させようとしているようで

才子を後押ししている

本作ヒロイン 印照才子 インテリサイコ ヒロアカアニメオリジナルから

個性 I Q 紅茶を飲むと少しの間だけ I Q 300 個性未発動時 I Q 15

0

(なお紅茶のブレンドやメーカーによって誤差が出る)

聖愛学院に通う印照財閥のご令嬢、印照家具財閥の長女

御坂トオルの許婚

再会した時、傷ついたアクセラ^トレータ^オを助けるため、印照財閥の人脈を使って身体機能や個性を補助するデバイスを開発する。

トオルからは「数式オタクが！」と言われたり、お節介すると煙たがれるが諦めずに更生させようと日々学校が終われば入院生活をしている、未来の旦那の元に駆けつける。

幼き日の約束を実現するためにヒーローを目指す

聖愛学院では親しい者からは「才様」と呼ばれる。

学内では熱狂的なファンがおり女子高のため百合が蔓延するほど

あまりにもミーハー的な子が多いので先生方からは抑えるようにと言われてるが本人はあまり気にしてない様子

印照親子

母 才子の母親

美鈴とは腐れ縁 小中高校一緒に通った中であり今の旦那とは美鈴のおかげで結婚

家族付き合いが長い為姉妹のような関係

父 才子の父

印照財閥の御曹司

妻とは高校の時に出会い告白して付き合い、周囲の反対を押し切って学生結婚

当初は駆け落ちしようかと思っただが財閥の当時の当主が大往生したためしかたなく

実家に戻り財閥の経営などを運営

妻を薦めてくれた美鈴に感謝しており、美鈴に才子の教育掛かりという仕事を与えた

トオルの存在を危惧しているが妻と美鈴が見守っているのを見て影ながら応援すること

その他諸々な人達 以下略

プレゼントマイク先生

アクセラレータが起こす問題処理担当苦勞人である

イレイザーヘッドとは同期

グラントリノ

アクセラレータの監視役

俊典から依頼を受けて暇つぶし

オールマイト 八木俊典

No1ヒーローであり平和の象徴

アクセラレータとの戦いをきっかけに、少し自己管理をし始めたこの頃

(正確には先生にお説教され物凄く凹んだらしい)

日々活動しているが程々な生活をしているが、アクセラレータが起こす問題の後始末を押し付けられちよつと財布がピンチなヒーロー！

とある因縁の襲来

聖愛学院にて起きた騒動は様々などで影響があつた

まずセキユリテイ対策は見直され、関係者一同に更なる警備強化が通達された

事の発端はアクセラレータトオトルが印照才子に忘れ物を届けるためだけに起こした行動であつたという。

始末書を書いているのは、彼の後始末を受け持っているプレゼントマイク。

「だあああ、あのやろおお休日返上で始末書書かなくてはいけないんだあ！」

「zzzzz」

「イレイザーヘッドお前はいいよなあ！」

(うるさい！こちとら警備会社に頭下げに行つたんだぞ)

寝袋あいさわしやうたにうづくまつてふて寝してるのは抹消ヒーロー

相澤消太プレゼントマイクとは同期であり、学生の頃からの腐れ縁である。

彼もまた、アクセラレータが起こした問題で駆り出された被害者である。

「カアアイレイザー！この後一杯付き合えよおお！」

「どこの店だ？」

「オマエ一杯ってなると即起きるよな！」

「とつとと終わらして一杯飲みに行くぞ： 無論お前の奢りでな！」

「今月給料シビィィィのにそれは」

「じゃあ手伝わんぞ？」

「ぐぬぬ！ワアツタヨ奢ってヤツカラヨオオ!!」

「ヨシ！」

ここうなったらやけ酒ダアア！

心の中ではもはや、やけくそになっていたプレゼントマイクであったのだ

一方ところ変わって

「はやくここから出しやがれええ！」

「うるせえ」

「私語は慎め」

刑務官が犯罪者達を注意する。

あらゆる悪党が収監されている、施設内では凶悪なヴィラン達が牢獄と言う場所で負け犬の遠吠えが響き渡る、この場所は

死刑すら生温い重犯罪者を収監する嚴重監獄！

その施設の名は監獄^{タルタル}

囚人が個性を使えば、牢の角から銃が発射され即座に射殺されるというシステム
必要最低限の動きですら束縛され死ぬまでいるという

そんな牢獄の中で例外が存在する

「看守さあんいつも新聞悪いな」

「ああ、お前さん程の肝が据わった囚人は初めてだよ」

他の囚人とは違い、自由に行き来できる人物こそ

悪党アクセラレータと協力関係であった囚人

今ではただの囚人？である

「自ら進んで、この監獄を指名するとは初めてだぞ？」

「こつちも事情があつて、ここに収監してくれて取引したんだよ」

他愛のない会話であるが、どこか意味があると看守は思う

「司法取引か．．．それでもないとここには」

「ああ．．． 奴等でも手を出せない場所ならここは最高の警備だよ」

「奴等とは？」

「かつて悪党が潰した組織だよ」

看守は外で何かが起きるのかと察する

「狂犬ヴァイランズゴキブリ並にしつこいからね」

彼が言った一言は数日後新聞一面トップを飾る事件が起きるとは思わなかつた

その頃の外では

雨が降りしきる中、アクセラレータ少年は買い物袋を手に杖を使って帰宅してる最中だ

「クソが傘ぐらい持ってくるべきだった」

ふてくされながら今朝の天気予報を馬鹿にしていた結果がこれである

上半身は**ずぶ濡れ**屋根のある場所で雨が止むのを待とうとする

ブルルルr

突如電話がなる

表示された相手は、インターネットリサイコ印照才子

ピ！ ワン切りする

すると

プルルル r

ピ！ またワン切り

プルルル r

ピ

「トオルさん！電話してるのに出ないのはめんどくさいからですか？」

「ちげえよ、今雨宿りしてるんだ！少しは待つ事出来ねえのか ああー！」

許婚の電話は正直ウザったいと思う

四六時中監視されなにかとお節介してくる、この女に頭がおかしくなりそうだ

「今、どこら辺にいますの？」

「知るか！適当にぶらついてたらここにいただけだ！」

「適当ってトオルさん実は、迷子じゃないですかそれって？」

沈黙が走る

電話越しで才子は思う

（実はトオルさん常識欠如してるのかしら？）と感じ

「端末から位置情報出すのでそこから動かないてくださいいね！」

「ダメエ！こつちのいる場所が分かるわけだな外せ今すぐに！」

「却下ですわ！」

この野郎、とんでもねえデバイスに位置情報機能入れてやがったな！

「あまり動かないでくださいトオルさん」

「帰ったら絶対泣かす！」

電話を切る

ピ！

「電話が切られたですわ！もう」

私は逆探知で彼の居場所を把握する

「銀座ですか： 随分と変わった場所にいますね」

彼女はすぐさま家の執事にな

「セバス、車を回してもらえますか？」

「かしこまりましたお嬢様」

そして彼の元へ向かう

一方その彼は

「帰ったら絶対泣かす！」

あの野郎そこまで監視するとはいい度胸してやがる

少年は、許婚のやり方が気にいらぬ。

だが母親の言葉脳裏に浮かぶ

「お節介だから？ 違うのよトオル、あの子はねあなたの将来を考えて面倒を見てるのよ、裏の世界でなにかあったかは聞かないのは過去を引きずって欲しくないからよ」

「チツ！ 今更！」

少年は母の言われた言葉が的を得ているので余計に気分が悪くなる

少年は夜空に降りしきる雨の中を光が差す方向へと歩き始めようとするが

キキイイイ!!

四駆の車が迫って来た

まるで少年を狙ったように

カチ! キュイイイン

ガチャン!

迫り来る車を個性で少年はスクラップにする

少年は

「ああん?どこの誰だか知らねえが・・・大方、俺を付けていた恨んでいたまたは利用する奴等がまだいるってかア?」

新しい玩具を見つけた子供のような表情をする

しかしその一言は

「ぶち殺す!」

過去の因縁が始まる　これは序章に過ぎない

とある悪党と残党　ただし絶望するのはためえらだ

「ああん？どこの誰だが知らねえが…　大方、俺を付けていた恨んでいたまたは利用する奴等がまだいるってかア？」

「ぶち殺す！」

ベクトル操作の個性でスクラップにしたアクセラレータは、車に向かって歩き始める
しかしその表情は新しい玩具を得た子供表情とはかけ離れた表情をする

「ギャハハハハ…　あーたまんねえよ！マジでテンションがあがってヨオ！」

「ひいひい！」

ガラクタになった車のドアを、個性で破壊し乗っていたドライバーに迫りながらどんな車の部品を掴んでは投げて壊して壊していく。

「なあ！俺の遊び相手になってくれるかア！ゲへへへ！」

「う…　ああああ!!」

ガチャ

ドライバーは腰にあった銃を使って反撃を試みるが：

彼の意識はそこで途絶えた

一方その頃

「雨が酷いですわね」

「お嬢様大丈夫ですよきつと」

トオルさんは出かける度にトラブルを起こす

この前の学校の問題もその一つだけど、数えればきりが無い程トラブルが絶えない

「そうねセバス・トオルさん」

窓越しに切なそうな表情をする才子

(嘆くことはありませんよお嬢様、きつとトオルさんはただ面倒な事が嫌いなだけです)

よ)

執事は才子の努力が実ることを願って、運転しながら遠くない将来後継者に仕える喜びを待ち望んでいる。

この時才子は、位置情報見てなかった事が後日新聞一面に想い人が号外に出るとはこの時は知る由もなかった。

同時刻の居酒屋

グビグビ

「カアアア!!レモンサワーが効くねエエエエ!」

「マイクうるせえぞ」

プロヒーロー2人が居酒屋で飲食を楽しんでいた

「あーお姉さんジョッキにもういっちょよ」

「よく飲むなあお前は」

イレイザーヘッドとプレゼントマイクは仕事を終えた後馴染みの店で他愛のない会

話をする

「しかしヨオ、アクセラレータの後始末は堪えるなイレイザー!」

「ああ、あんなだけの個性と力がありながら公安の犬になるとはな」

本来の彼の行いは監獄行きで、将来出てこれない程の罪を犯しているが

未成年が、あの悪党だということ世論が知ったらメディアは面白がつて取材をする
「社会的に考慮して、公安側も彼の特徴である白髪を利用して年寄りが悪党だったとい
うことに捻じ曲げたからなあ」

「アアーマッタクダゼイレイザーおつと酒が入ってないぞホラヨ」

「悪いな」

注がれたお酒をもらうイレイザーお酌するプレゼントマイク

アクセラレータの状況を互いにお酒のつまみ的な会話で扱う

「まあ一番被害が来てるのは」

「プハハハオールマイトナンダヨナア!あの人お人好しいとこだぜえ」

「まあ オールマイトさんも肩の荷が下りるのはまだ先だな」

しかしその笑いの絶えない会話がお酒を吹き出す程の事案が起きる

「速報です！」

「なんだ？」

居酒屋にいる客たちがTVの速報に目を向ける

「本日先程 銀座4丁目にてヴィランが暴れていると報告が入りました」

「そいや今日あそこの担当ってさいレイザー」

「ああ たしか13号さんじゃなかったか？」

2人は今日は既にプライベートな時間だから次の日に向けて身体を労ってる

「現場からの情報によりますと、車がまるで何かにぶつかった感じで破壊された車が数台散らかっており一部は火災が発生している」と

「ナアイレイザー物凄く嫌な予感するんだが？」

「俺もだ」

まさかなあ？いや流石にそれは

今日はもうオフだぞ

酒を飲み始める

2人の嫌な予感は次の現場の画面の切り替えで

「現場の山田さあん！」

「はいこちらは銀座上空です、先程現場から更に火の手があがり現場はまるで戦場の感じですよ」

「具体的には？」

「これから現場に近づいてみます」

「ギヤアアアア!!？」

「今の悲鳴は？」

「なんだあれはあ!!？」

へりを通して全国に生中継される現場は騒然とした

「軍隊らしきヴィラン達が：あれは狂犬ヴィランズですかつて九州で暴れていた組織です」

「気を付けてください、なにをされるかわからないのでなるべく」

「報道局！白髪の少年がヴィランを倒しております」

カメラマンがズームした先が、リアルタイムで報道される

「ブフウウー!!？」

イレイザーヘッドとプレゼントマイクはお酒を吹き出す

「あいつなにやってんだあ!!」

「まずいぞあれは」

「お姉さん勘定だ!」

イレイザーヘッドは万札を置いて居酒屋を後にする

「あ お客さんお釣り」

「釣りは取つといてくれ」

2人は居酒屋かを飛び出し現場へと向かう

ところ変わってその現場はというと

「なに寝てんだあ?これからまだまだ遊ばせて貰うんだからよオ」

「グワアア!」

戦闘員は胸倉をつかまれそのまま壁に激突する
衝撃でコンクリートの壁にクレーターができる

「散開して撃ち続けろお」

「サーイエッサー！」

狂犬の戦闘員達は隊長の指示を受け行動を開始して撃ち始める

ドガガガガ

マシンガンから撃たれた弾はアクセラレータに向けて展開される

しかし

キイイイン

個性を使ってアクセラレータはすべてを反射する

「ギャアア」

「いてえよ」

「くそ、まるで通用しない」

たくよお、こっちは帰ろうとしてたのにまあ暇つぶしにはなるか
突如光が差し込む

上空にいるヘリから少年が照らされる

「面倒だないや、いい機会だ」

少年は、襲ってきたヴィラン達を次々と倒していく様子を見せる。

「これは凱旋でも売名行為でもねえただの蹂躪だ！」

次々と少年は、車をスクラップにしていく

その様子を上空から見ているリポーターは

「少年です！白髪の少年がヴィランズ達を倒しております」

世界は彼に目を向け始めるそれはまるで悪^{アクセラレータ}党が復活したと！